太宰府市の文化財　第 106 集

筑前国分寺跡 3

－西外郭施設・付帯施設の調査－

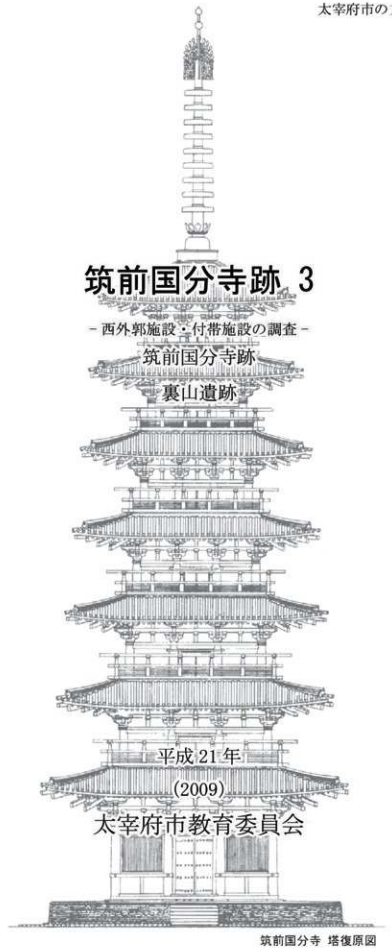
筑前国分寺跡

裏山遺跡

平成 21 年

(2009)

太宰府市教育委員会



筑前国分寺 塔復原図

【文化ふれあい館展示】

筑前国分寺跡 3

－西外郭施設・付帯施設の調査－

筑前国分寺跡

裏山遺跡

平成 21 年

(2009)

太宰府市教育委員会

筑前国分寺周辺の環境【南西から撮影】

筑前国分寺　寺域と報告箇所【赤塗箇所　南から撮影】

序

本報告書は、奈良時代中頃に鎮護国家を祈念して建立された筑前国分寺跡に関る埋蔵文化財調査報告書です。

調査地は、太宰府市国分3・4丁目に所在し、聖武天皇によって発願され鎮護国家、安寧を祈念して建立された筑前国分寺跡になります。本報告書に所載する調査は、筑前国分寺跡の寺域を確認することを目的として実施した調査になり、第24・26・27次調査ならびに、寺北外郭施設推定地の確認調査成果を掲載しております。加えて、周辺調査として裏山遺跡第1次調査成果を載せております。これらの調査により、寺の西ならびに付帯施設としての道路の確認をはじめ、筑前国分寺に関る多くの成果を得ることができました。

本書が、学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、当該調査に対しご理解頂きました皆様をはじめ、関係諸機関の皆様方に心よりお礼を申し上げます。

平成21年1月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1. 本書は、太宰府市国分にて実施した、筑前国分寺跡ならびに裏山遺跡に関わる埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は、平成 11 年度から平成 20 年度までに実施した確認調査を含む 5 現場であり、個々の調査情報に関する詳細については第Ⅰ章にて記載している。
3. 現地調査ならびに整理作業担当者は、第Ⅰ章にて記載している。
4. 遺構実測図ならびに遺構配置図は、全て国土調査法第Ⅱ座標系を基準とし、図中に記載される方位は、特記しない限り座標北（G.N）を指している。
5. 現地調査における遺構記録（実測図作成・写真撮影）は、調査担当者ならびに下記に記す者が行い、空中写真撮影は（有）空中写真企画が行った。

【実測作業従事者】

深江（佐藤）暁子、久味木理恵

6. 遺構図関係の浄書は、報告担当者ならびに下記の者が行った。

久味木理恵、森部順子、久家春美、福井円、木戸雅美

7. 遺物実測ならびに遺物実測図浄書は、報告担当者ならびに久味木理恵、森部順子・久家春美、福井円、木戸雅美が行った。
8. 遺物写真撮影は、（有）文化財写真工房への委託業務として実施している。
9. 本書に掲載される遺構番号等の標記は、下記要領で理解される。なお報告文の中で、前後の文脈から内容が明らかなものについては、遺跡略称・調査次数を省略するものもある。

国　26　SD　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

遺跡略称　国：筑前国分寺跡　裏：裏山遺跡

遺構種別　SF：道路跡　SD：溝　SK：土坑　ST：墓　SX：その他の遺構（小穴など）

10. 本書で使用した遺物分類は、以下のものによっている。

土器　『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第 7 集　太宰府市教育委員会　1983 年
『宮ノ本遺跡Ⅱ　－窯跡篇－』太宰府市の文化財第 10 集　太宰府市教育委員会　1992 年

陶磁器　『大宰府条坊跡ＸＶ』太宰府市の文化財第 49 集　太宰府市教育委員会　2000 年

瓦　『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館　2000 年
『宝満山遺跡群　4』太宰府市の文化財第 79 集　太宰府市教育委員会　2005 年

11. 報告にあたって実施した遺物分類などの整理作業は、各報告担当者が行った。
12. 出土した金属・木製品などの応急処置は、下川可容子（㈱タクト）が担当した。
13. 本書の執筆は、文末に記載し、編集は中島恒次郎が担当した。
14. 埋蔵文化財の記録類（出土遺物・図面・写真など）は、太宰府市教育委員会にて管理し、太宰府市文化ふれあい館にて保管している。

15. 現地調査ならびに整理作業にあたって、下記の方々よりご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。
狭川真一（（財）元興寺文化財研究所）、馬田弘稔（九州歴史資料館）
16. 第 26 次調査出土遺物実測作業ならびに遺物解説文章作成にあたって、下記の方よりご協力いただいた。記して感謝申し上げます。
本川美穂子（㈱埋蔵文化財サポートシステム）

目次

Ⅰ．環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎）　1
Ⅱ．調査組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎）　3
Ⅲ．調査報告
筑前国分寺跡
1．第24次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（宮崎亮一）　5
2．第26次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎・本川美穂子）22
3．第27次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（井上信正）28
裏山遺跡
4．第1次調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（下高大輔）42
筑前国分寺跡北外郭施設推定地
5．確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎）48
Ⅳ．成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（中島恒次郎）49

付表
遺構一覧
出土遺物一覧

写真図版

Ⅰ．環境

筑前国分寺は、大宰府条坊外の北西部[1]、大野城跡が所在する四王寺山の南西麓に位置し、聖武天皇が意図した「好処」である低位段丘上に占地している。基盤層は早良型花崗岩によって構成され、その上位に砂礫およびシルトによる新規段丘構成層がのっている（太宰府市、2001）。丘陵自体は、東に高く西に低い形状をとり、西方へ開く景観を呈している。このことに起因し、西方からの眺望は、まさに国の華、好処占地を標榜するには好地に位置していることになる。

これまで、筑前国分寺跡・尼寺跡ならびに辻遺跡として埋蔵文化財調査が太宰府市をはじめ福岡県教委・九州歴史資料館によって実施されてきており、旧石器から近世にいたる幅広い人々の生活痕跡が確認されてきている。国分寺がのる丘陵上では、国分千足町遺跡で弥生～古墳期の集落が確認されるなど、自然災害に強い安定空間であったことがうかがえる。太宰府は、大宰府設置とともに、古代において大規模な地形改変が行われることになり、官人居住域としての大宰府条坊の施工および関係施設の建設など、前代とは規模において大きく変わったものと考えられる。国分寺周辺においても奈良期の遺跡が形成されはじめるが、これまで条坊痕跡と考えられるものは明らかにし難い。古代において生活痕跡が活発化する時期は、やはり国分寺建立を契機とし、国分寺建立に関る瓦窯操業（史跡国分瓦窯跡）、国分寺・尼寺への進入道路（国分松本遺跡第6次調査）造営を顕著なものとして、周辺整備が進められていったものと考えられる。国分寺がいつまで存続していたのかについては、文献資料や考古資料からみるかぎり鎌倉期までたどることができる。国分寺東方に隣接している辻遺跡では、鎌倉期の建物・井戸など生活に関る痕跡が確認できる。特筆すべきものとしては、辻遺跡第1次調査にて南北の溝が確認でき、埋没時期が平安後期であることをみると、政庁Ⅲ期施工条坊の廃絶時期に近似している（太宰府市教委、1997）。政庁Ⅲ期施工条坊の範囲は、現状で鏡山猛氏復原の22条24坊説での見解が多く提起されているものの、市域で確認される平安後期埋没の東西南北路側溝の分布を今一度整理し、その分布から範囲を再確認していく必要がある（中島、2008）。室町期以降の生活痕跡は激減し、居住の場の中心は、市域東部、いわば太宰府天満宮周辺へと移動したものと推定される。現況地形の中で、これまで述べてきた諸施設の位置を想像できる範囲が残されている箇所が国分寺周辺には多くあり、国分寺造営後に大規模な地形改変が、自然災害以外には生じなかったことが想像できる。地形が失われた箇所は、国分寺寺域北西部であり、国分寺北東部に位置する「新池」「上ノ池」に端を発した谷地形内に、平安・鎌倉期の多量の土砂を堆積する層が確認されており、当該期に「洪水」を生じさせる自然災害があったことが想定される。結果として国分寺寺域北西部は「失われた」状況にあり、加えて寺北外郭施設も確認できていない。当該地は、平成15年7月におきた集中豪雨災害にて土石流が流れたことを考えると、「新池」「上ノ池」が所在する谷ならびに陣ノ尾川の谷は、古代より自然災害に見舞われる地であったことが想像できる。

【文献】

太宰府市（2001）『太宰府市史　環境資料編』

太宰府市教育委員会（1997）『辻遺跡』太宰府市の文化財第33集

中島恒次郎（2008）「居住空間史としての大宰府条坊論」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室50周年記念会

【註】

1）鏡山猛氏による条坊復原案をはじめ、学説史上は多くの条坊復原案が提起されている。その中で、阿部義平氏による条坊復原案では、国分寺および尼寺は条坊内に含まれる復原がなされている。その当否については、鏡山猛氏による復原案自体が、平安期に書された文献記載内容から提起された範囲に縛られており、考古資料から適否を検討されたものではない。しかし現状にあっても条坊内外を画する施設の検討など、鏡山猛氏以来の諸氏の復原案を十分検討できるだけの積み上げがなされていないことに変わりはなく、このような状況にあって、阿部氏復原案を是認する根拠も提示し難い状況であることから、ここでは、周知の遺跡としての鏡山猛氏が提起した「条坊」範囲を使用している（中島、2008）。

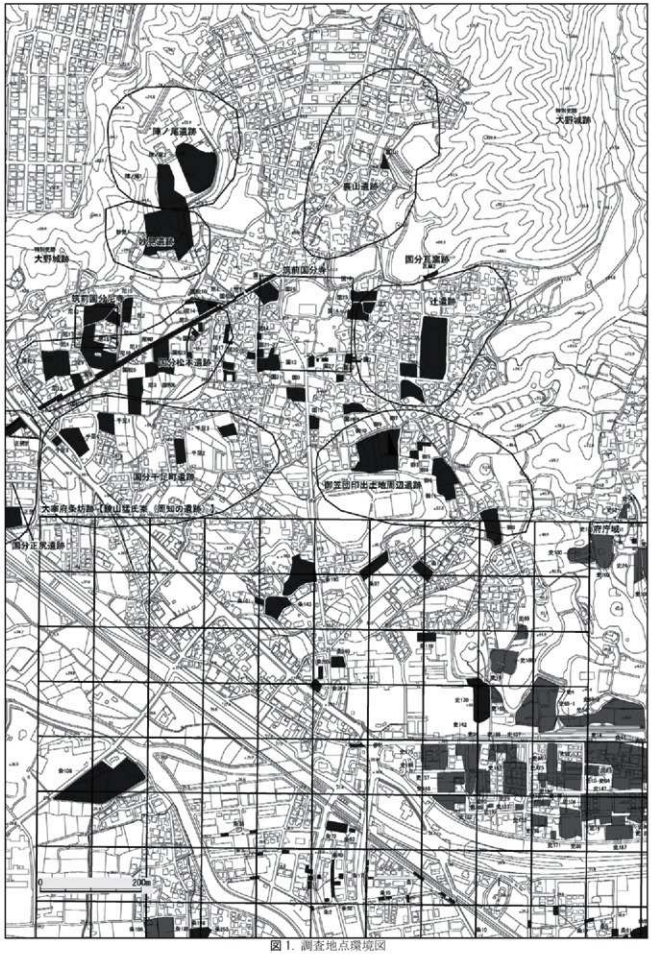

薄ノ尾遺跡
大野城跡
鬼山遺跡
妙見遺跡
大野城跡
国分五条跡
国府国分寺
筑紫国分寺跡
辻遺跡
国分松本遺跡
国分十三町遺跡
大東尚条坊跡（鬼山城址条、国知の遺跡）
国分正覚遺跡
0
200m

図 1. 調査地点環境図

Ⅱ．調査組織

以下に調査組織を記載する。なお調査年度は、実施年度時の組織を記載し、整理作業は調査終了から随時実施してきたが、主たる整理年度として平成 19・20 年度を記載している。

■筑前国分寺跡第 24・26 次調査

（平成 11 ／ 1999 年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥（～ 6 月 30 日） 白石純一（7 月 1 日～）
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人 今村江利子（～ 6 月 30 日） 野寄美希（7 月 1 日～）
	嘱　託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 **中島恒次郎**【26 次調査】 井上信正
	技　師	高橋　学 **宮崎亮一**【24 次調査】
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子

■筑前国分寺跡第 27 次調査

（平成 13 ／ 2001 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原　稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 中島恒次郎 **井上信正**【27 次調査】 高橋　学 宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 佐藤道文

■北外郭施設確認調査

（平成 16 ／ 2004 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人（4 月 1 日～）
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～ 6 月 30 日） 齋藤実貴男（7 月 1 日～）
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮 **中島恒次郎**【確認調査担当】
	主任技師	井上信正 高橋　学 宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 柳　智子 渡邊　仁 長　直信 松浦　智

■裏山遺跡第１次調査

●整理作業

（平成 19 ／ 2007 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人（～ 9 月 30 日）　松田幸夫（10 月 1 日～）
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信（～ 9 月 30 日）　菊武良一（10 月 1 日～）
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一　齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利　山村信榮　**中島恒次郎**【報告担当】
	技術主査	**井上信正**【報告担当】
	主任技師	高橋　学　**宮崎亮一**【報告担当】
	技師（嘱託）	柳　智子　下高大輔　大塚正樹　端野晋平

（平成 20 ／ 2008 年度）

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松田幸夫
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一　齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利　山村信榮　**中島恒次郎**【報告担当】
	技術主査	**井上信正**【報告担当】
	主任技師	高橋　学　**宮崎亮一**【報告担当】
	技師（嘱託）	柳　智子　大塚正樹
		下高大輔【裏山遺跡第 1 次調査担当　報告担当】

Ⅲ．調査報告

1. 筑前国分寺跡第24次調査

1. 調査経過

調査地は太宰府市国分3丁目619-1の一部、619-5で、筑前国分寺跡の西端に位置する。

平成11（1999）年2月12日に専用住宅建築の計画に先立ち、建築会社より埋蔵文化財の照会があり、筑前国分寺跡の西側外郭線の推定ラインに位置するため、その重要性を説明・協議を行い、保存を前提に確認調査が必要であることで合意に至り、発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成11（1999）年4月13日から5月7日にかけて行った。遺構は必要最小限の掘削にとどめ、真砂土で保護した上で、埋め戻し保存した。開発対象面積は209.14㎡、調査面積は57㎡を測る。調査は宮崎亮一が行った。

2. 基本層位

調査前は畑として利用されており、耕作土が厚さ0.3mほど堆積し、その下に灰茶色土が遺構面を覆っている。遺構面までは地表から約0.5m前後を測る。西側の市道は調査地より0.3m程低いため、市道からは約0.2m高い位置に遺構面が存在することになる。

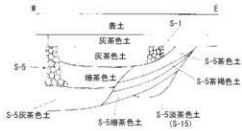


図2. 調査区土層模式図

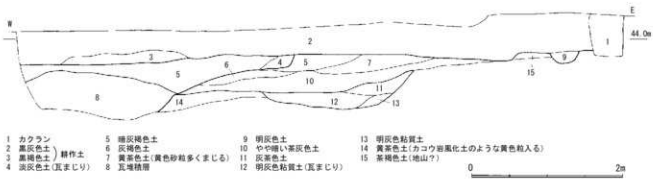


図3. 調査区北壁土層実測図（1/50）

3. 遺構

1) 柵列

24SA010

3個の柱穴を確認した。掘り方はやや不明瞭なプランで、一辺約0.6mの隅丸方形を呈し、深さは0.13～0.38mを測る。柱間は3.9mと2.8mと不規則である。方位はN-3°　16′　49″　-E。筑前国分寺西外郭線の柵列と推測される。遺構は半分のみ調査を行い、埋め戻し保存している。

2) 溝

24SD015

段落ち（SX025）の東端を南北に走る溝で、方位はN-3°　34′　35″　-W。規模は幅が1.68～1.88m、深さは溝より東側が一段高いため、東側との落差は0.38～0.55m、西側との落差は0.15～0.18mを測る。溝内には瓦片が堆積している。

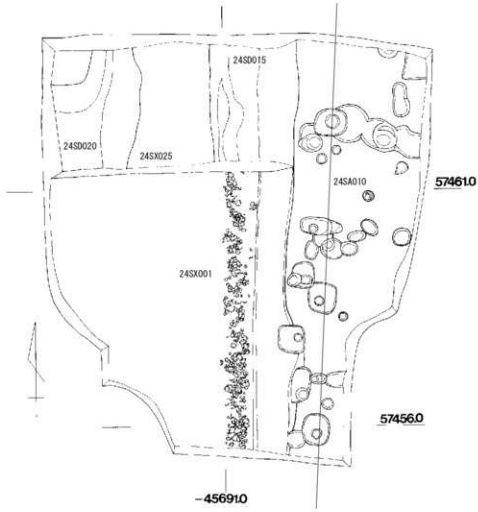


図4. 遺構配置図（1/80）

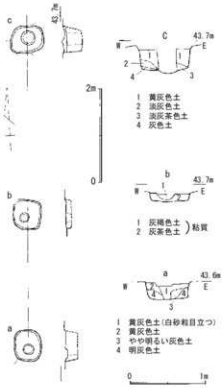


図5. 24SA010 遺構実測図（1/80）

24SD020

逆L字形の溝で、南北と西にも続いている。南北の方位はN-3°20′25″-E。SX005の瓦堆積層の下で検出された浅い溝だが、調査区際とトレンチ内という調査範囲が狭いこともあり、若干不明確である。溝の東肩はSD015と平行するため、2条の溝に挟まれた部分は、幅約1.8mの道路の可能性も考えられる。

3) その他の遺構

24SX001

堆積層と遺構面の境界部分で瓦片が列状に検出されたが、これはSX025を埋める鎌倉期の堆積層が露出した部分であり、意図的に並べたものではない。堆積状況から東側から流入したものと推測される。

24SX005

瓦片が高さ0.6mほど山積みされた状態で検出された。瓦以外に土砂を殆ど含んでいないことなどから、自然堆積でなく人為的に廃棄されたもので、いわゆる瓦礫の山というに相応しい状況であった。

24SX025

24SA010の西側に落ち込む段落ちで、トレンチを設定し調査を行い、その他は未掘のまま埋め戻し保存している。その中に瓦礫（SX001・005）の廃棄状況が確認され、底面にSD015・020が検出された。

4. 遺物

第24次調査の出土遺物の殆どが瓦であった。大小様々な破片が出土した。よって、瓦を表3のように分類し、重さで主に縄目叩きと格子叩きの出土傾向を示した。以下遺物解説中に出てくる格子叩きの後の()内の分類は、この表3に基づく。

1) 溝

24SD015（SX005淡茶色土）（図6）

瓦類

軒丸瓦（1）　全体的に摩滅が目立ち、瓦当面は蓮子と珠文が確認できるだけである。内面は瓦当接合のための強いナデ調整。瓦当部分の径は16.6cmである。焼成は不良で、乳白色を呈する。

丸瓦（2、3）　2は内面に糸切り痕と布目痕が明瞭に残り、外面は縄目叩きをナデ消している。端部はヘラ切りし折っている。焼成は良好。3は外面が縄目叩きの後ナデ調整するが、摩滅の著しい。内面は布目痕が残る。焼成不良で淡黄白色を呈する。

軒平瓦（4・5）　4は均整唐草文の瓦当端部で、凹面は摩滅し、凸面はナデ調整している。焼成は不良で、淡灰色や暗灰色を呈する。5は均整唐草文の瓦当中央付近で、瓦当面も上部を欠損している。全体的に摩滅し、凹面に僅かに布目痕を残す。

平瓦（6）　凸面は縄目叩きで、幅約8.3cmで叩き痕の残存状況が異なっている。摩滅も目立つが、ナデ消した可能性も考えられる。凹面には布目痕に混じって模骨痕が確認できる。側面はヘラケズリ。幅22.5cm、厚さ2.9cm。色調は黄白色で還元不良で、焼成も不良である。

熨斗瓦（7）　幅11.9cm。側面はヘラケズリ、凹面には布目痕に混じって模骨痕が確認できる。凸面には縄目叩きが確認できるが、摩滅も目立つ。焼成不良で、乳白色を呈する。

2) その他の遺構

24SX001（図7）

瓦類

丸瓦(1)　外面は格子叩き（小）、内面には布目痕がある。切断面は内側半分がヘラケズリで、外側が折っている。焼成は良好で、淡灰青色を呈する。

平瓦（2）　外面は細い正格子の叩きで、一部叩き目をナデ消している。焼成は良好で、淡灰褐色を呈する。

24SX001 **灰茶色土**（図7）

土師器

坏a×小皿a（3）　底部回転ヘラ切りだが、その他調整は摩滅し不明。

鍋（4）　肥厚させた口縁部である。焼成はやや不良で、淡灰橙色を呈する。全面砂粒が浮き出るほど摩滅している。

須恵質土器

鉢（5）　口縁部は僅かに肥厚する。内面は回転ナデ。外面はやや粗い回転ナデ。焼成は良好で、灰色を呈する。

瓦類

平瓦（6～11）　6は格子叩き（太）で、格子目を一部粗くナデ消している。凹面は細かい布目が残る。焼成は良好で茶褐色を呈する。7は二重格子（大）で、その中に細い線でさらに細かい格子が作られている。8は格子叩き（中）で、部分的に格子をナデ消している。焼成は良好で明灰色を呈する。9・10は格子叩き（小）で、9は内外面とも一部ナデ、凹面端には分割突帯が残り、浅くヘラ切りし、折り取っている。10は、やや土師質で淡白褐色を呈する。凹面は叩き目をナデ消している。11は規則性のない格子叩きで、格子内に「＋」や「×」

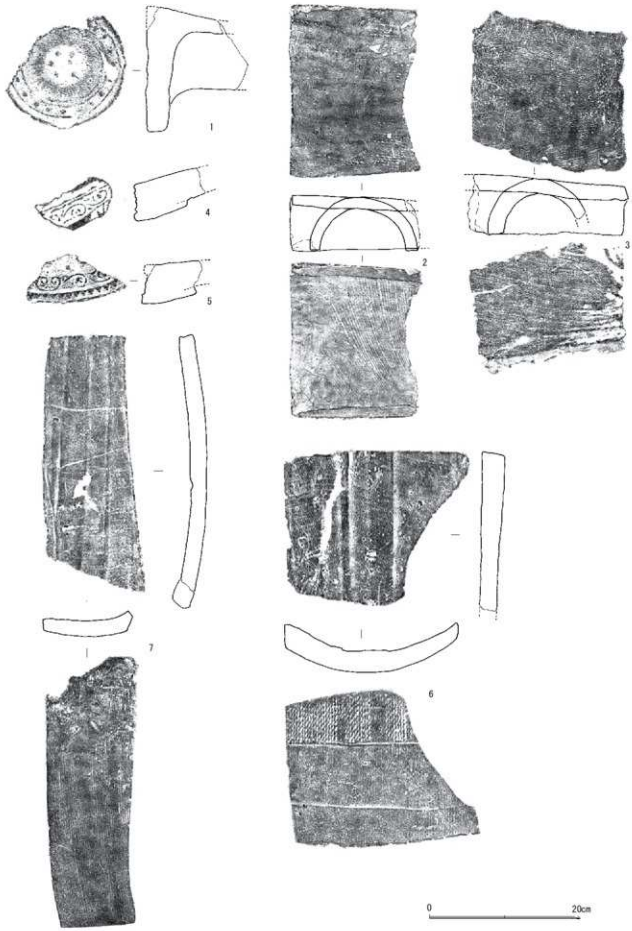


図6. 24SD015（SX005）出土遺物実測図（1/5）

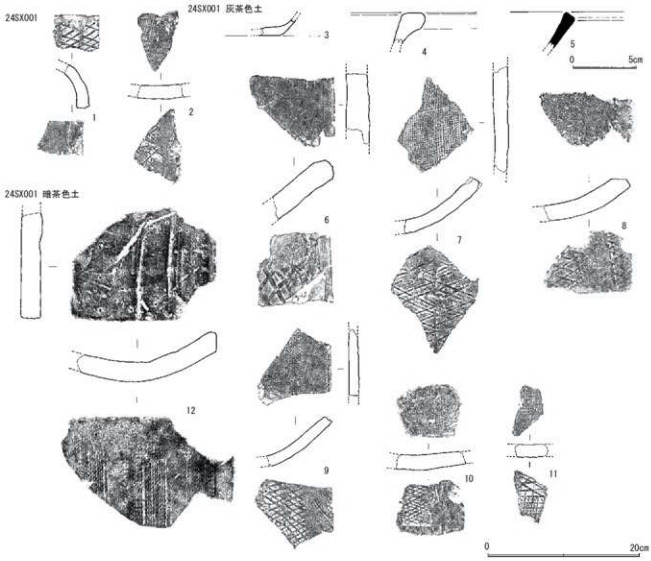


図 7. 24SX001 出土遺物実測図（1/3、1/5）

などの叩き目を刻んでいる。

24SX001 暗茶色土（図 7）

瓦類

平瓦（12）　全体的に摩滅するが、凸面は縄目叩きだが、部分的に叩きを行っていない。凹面には模骨痕が明瞭に残る。側面はヘラ切りで、面取りも行っている。焼成はやや不良で、灰黄白色を呈する。

24SX005（図 8・9）

瓦類

軒丸瓦（1 ～ 4）　全体的に焼成が不良で、摩滅が目立つ。1 は複弁蓮華文で、摩滅著しく、外縁は素文とみられる。内側には瓦当接合のナデが残る。2 は複弁 8 弁蓮華文で、中房の蓮子は 1 ＋ 8。外縁は素文。内側には瓦当接合のナデが残る。3 は複弁蓮華文で、中房の蓮子は 1 ＋ 8。外縁は素文。内側には上方向へのナデがみられる。4 は複弁 8 弁蓮華文で、中房の蓮子は 1 ＋ 4 ＋ 8。内側にはナデが残る。

丸瓦（5 ～ 9）　側面は内側から半分ほどヘラ切りし、折り取ったまま未調整である。内面は全て布目痕がある。5 は格子叩き（大）で、裏面には布目の綴じ合わせた痕跡が残る。焼成は良好で淡灰色を呈する。6 ～ 9 は格子叩き（小）。6 は赤橙色を呈する。8 は格子叩きに「介」の文字銘がある。

平瓦（10 ～ 22）　10 は縄目叩き。凹面に布目痕が僅かに残り、模骨痕が確認できる。11 は粗い縄目叩き。凹面は布目痕に糸切り痕が残り、端部は面取りしている。12 は格子叩き（太）。13・14 は格子叩き（大）で一部

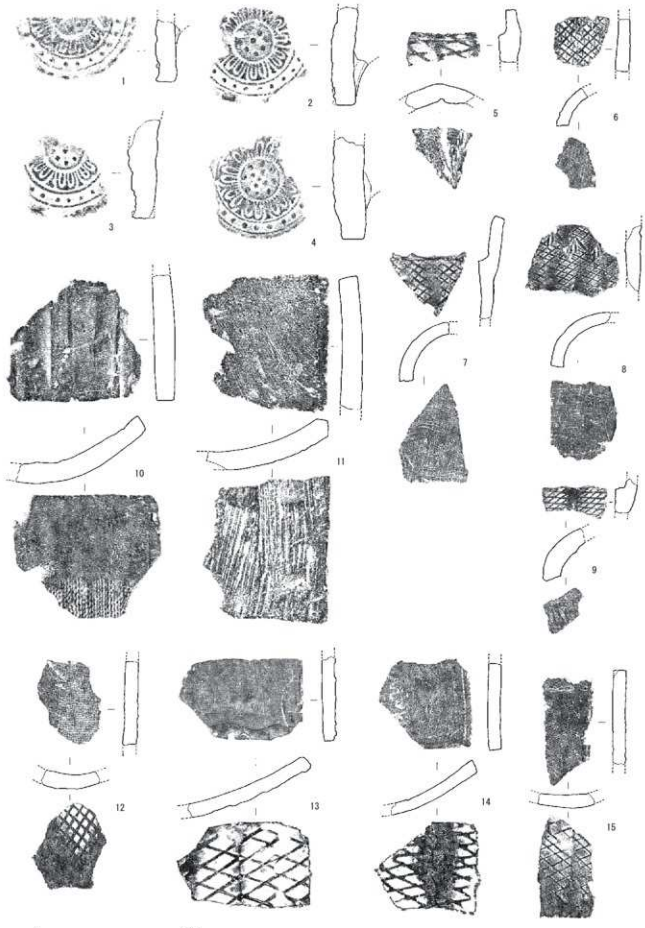


図 8. 24SX005 出土遺物実測図①（1/5）

叩きをナデ消している。15～18は格子叩き（小）で、全体として焼成が若干不良で、茶灰色を呈する。19は斜格子叩き。20は正方形叩きで、側面はヘラケズリを行う。焼成は若干不良で淡黄茶褐色を呈する。

塼(23)　大きさは18.5cm、厚さ6.0cm。剥落や欠損が目立ち、表面が残るところは僅かである。胎土は0.5cm以下の砂粒を多く含み粗い。焼成は不良で、淡黄茶色を呈する。

石製品

石鍋（24）　滑石製石鍋の底部付近の破片で、内外面にケズリ痕跡が残る。

24SX005 灰茶色土（図10～14）

土師器

坏 a（1）　復原底径7.6cm。底部は回転糸切りとみられる。板状圧痕あり。

椀 c（2）　復原高台径9.8cm。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。

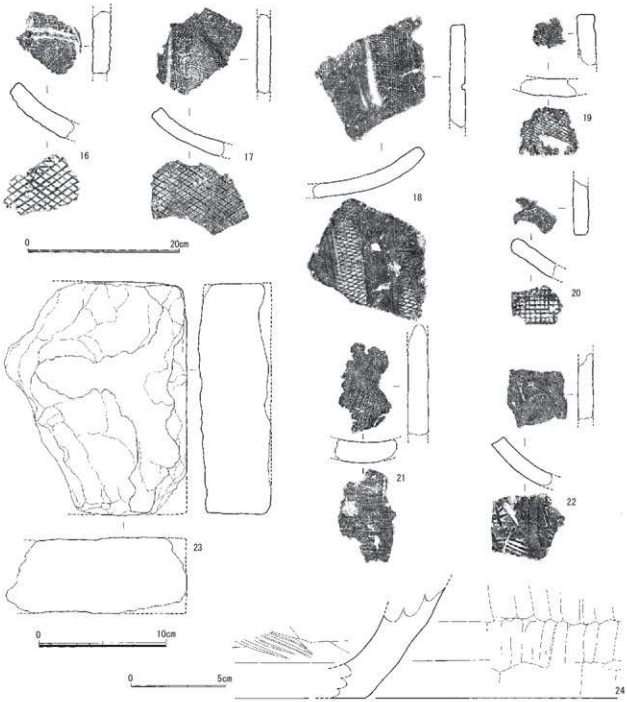


図 9. 24SX005 出土遺物実測図②（1/2、1/3、1/5）

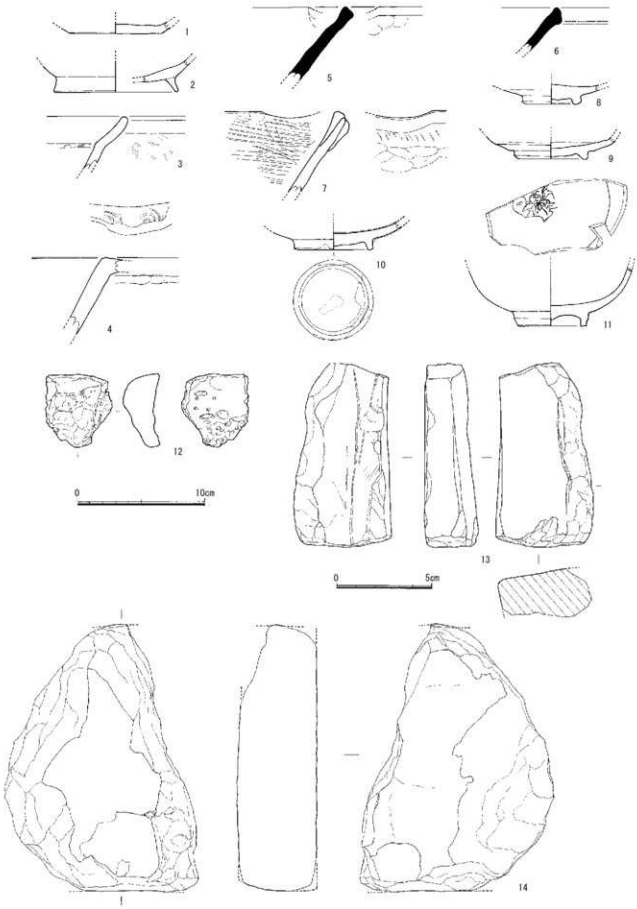


図 10. 24SX005 灰茶色土出土遺物実測図①（1/2、1/3）

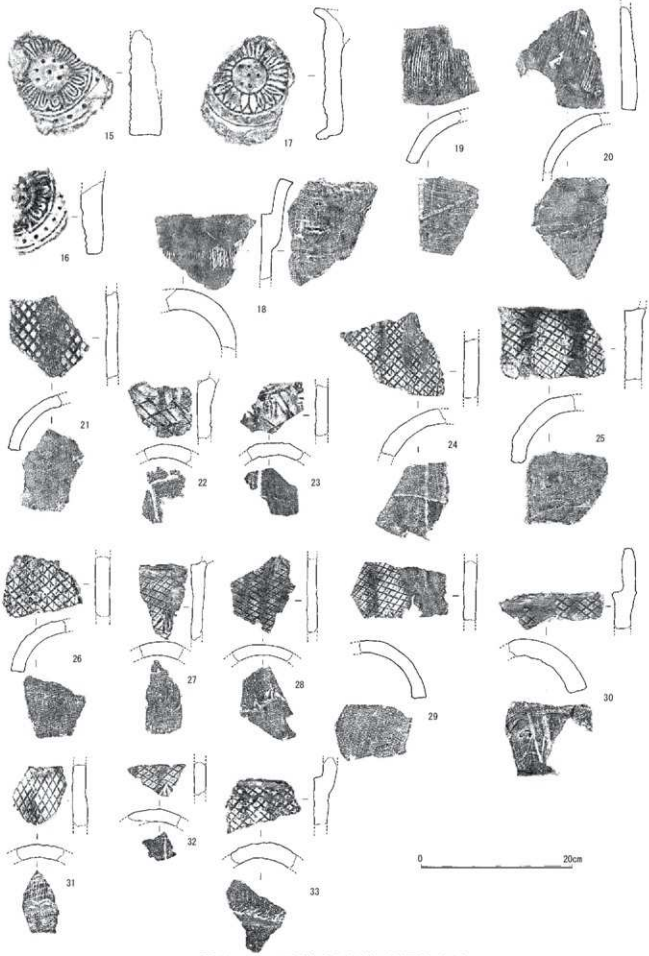


図 11. 24SX005 灰茶色土出土遺物実測図②（1/5）

鍋（3・4）　3は外面に煤が付着し、その隙間にハケ目が確認できる。口縁部は回転ナデ、体部内面はヨコハケ。4は口縁部を外側に屈曲させ、端部上面には同心円状の文様がみられる。外面は摩滅し、内面はナデ調整。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で淡黄橙色を呈する。

須恵質土器

鉢（5・6）　口縁部を若干肥厚させる。焼成は良好で淡灰青色を呈する。内外面とも回転ナデ。5は片口が僅かに残る。6の外面は粗いナデ調整。

瓦質土器

鉢（7）　片口の鉢で、外面は摩滅し僅かにタテハケが残る。内面はヨコハケ。焼成は良好で、暗灰黒色を呈する。

白磁

椀（8・9）　8は、胎土はきめ細かく白褐色を呈し、淡白黄色釉を薄く施釉する。体部下半と高台内面は露胎である。細かい貫入がある。高台径4.7cm。9は胎土がきめ細かい淡灰白色で、淡緑灰色釉を薄く施釉する。体部下半と高台内面は露胎である。体部下半と高台内面は露胎で、内面底部も輪状に露胎で、焼成により明茶褐色に変色している。高台径5.8cm。

龍泉窯系青磁

椀（10・11）　10は緑灰色釉を厚く施釉し、大きな貫入がある。高台畳付は露胎。Ⅳァ類。高台径6.3cm。11は緑灰色釉で貫入がある。高台畳付は露胎で、内面底部に文様を描く。Ⅳ ェ類。高台径5.5cm。

土製品

塼(14)　摩滅や欠損が著しいが、厚さは6.3cmを測る。焼成はやや不良で、胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗灰色や淡灰色を呈する。

瓦類

軒丸瓦（15～17）　15は複弁6弁蓮華文で、弁は独立して表現されているようだが、間弁は2枚おきに入っている。中房蓮子が1＋7である。16は複弁蓮華文。17は単弁22弁蓮華文で、弁はやや尖った形状をなし、子葉がない部分もある。中房蓮子は1＋8で、珠文は全て欠損している。

丸瓦(18～33)　全体的に摩滅も目立つが、焼成は比較的良好である。18～20は外面が縄目叩きの後ヨコナデし、縄目をナデ消している。21～33は外面に格子叩き、内面に布目痕があり、色調は大方灰色や暗灰色を呈する。21は格子叩き（太）、22・23は格子叩き（大）で、23は格子内に「介」の字がみられる。24～33は格子叩き（小）で、24～26は格子内に縦線が入る。27・32には格子内に「介」の字がみられる。

軒平瓦（34～36）　34は均整唐草文で、内外面とも摩滅しているが、凸面には縄目叩きを施す。35は均整唐草文で、内外面とも摩滅が目立ち、僅かに布目痕や縄目痕が残る。36は中心飾がないタイプで、中心線を置き、忍冬唐草文を施す。色調は淡暗灰色を呈し、焼成は良好で、文様はシャープである。

平瓦（37～64）　37～45は凸面に縄目叩きを施す。側面はヘラケズリで、40・42・44は凹面側をさらにヘラケズリし、面取りしている。37は凹面に粘土帯の痕跡が確認でき、糸切り痕が残る。38は内面に模骨痕が残る。41は凹面の布目を一部ナデ消している。42は凹面に糸切り痕が残り、布目を一部ナデ消している。44は凹面に模骨痕が残り、凸面は縄目叩きを一部ナデ消している。45は縄目叩きの後に「三月」とヘラ書きしている。46～63は凸面に格子叩き、凹面に布目痕を残す。色調はおよそ灰色や灰茶色で、焼成は良好だが若干摩滅するものもある。46～49は格子叩き（大）、47・49は叩きを一部ナデ消す。48は格子叩きの幅が6.7cm。46・49は叩きを一部ナデ消す。50～54は格子叩き（中）、51・52は叩き目を一部ナデ消している。53は側面をヘラ切り後に凹面側をヘラケズリし、面取りしている。55～61は格子叩き（小）、55・56は格子叩きが重なっている。57は叩き目に混じって方形状の異体字がみられる。58は格子叩きに「井」の文字がみられる。62は菱形の陰文の中に「平井」の文字を施している。63は方形の陰文で、凹面に糸切り痕が残る。64は凸面に複弁6弁蓮華文の瓦当笵を型押し、周囲をナデている。凹面は布目痕をナデ消しする。

金属製品

鉱滓（12）　いわゆる椀型滓というもので、土の混入が少ないが、鉄分は殆ど含んでいない。大きさは5.7×

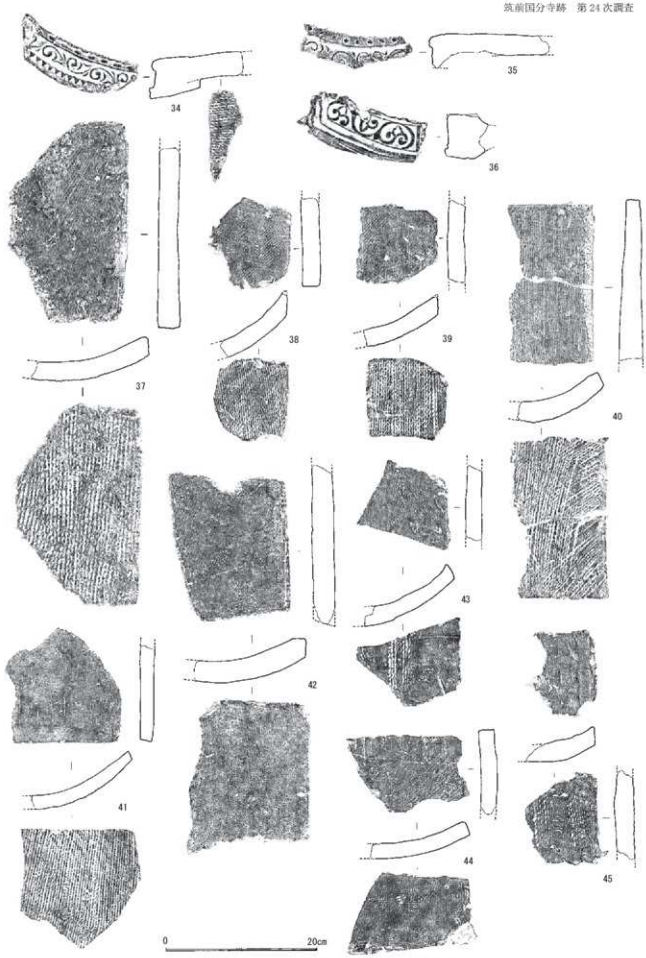


図 12. 24SX005 灰茶色土出土遺物実測図③ (1/5)

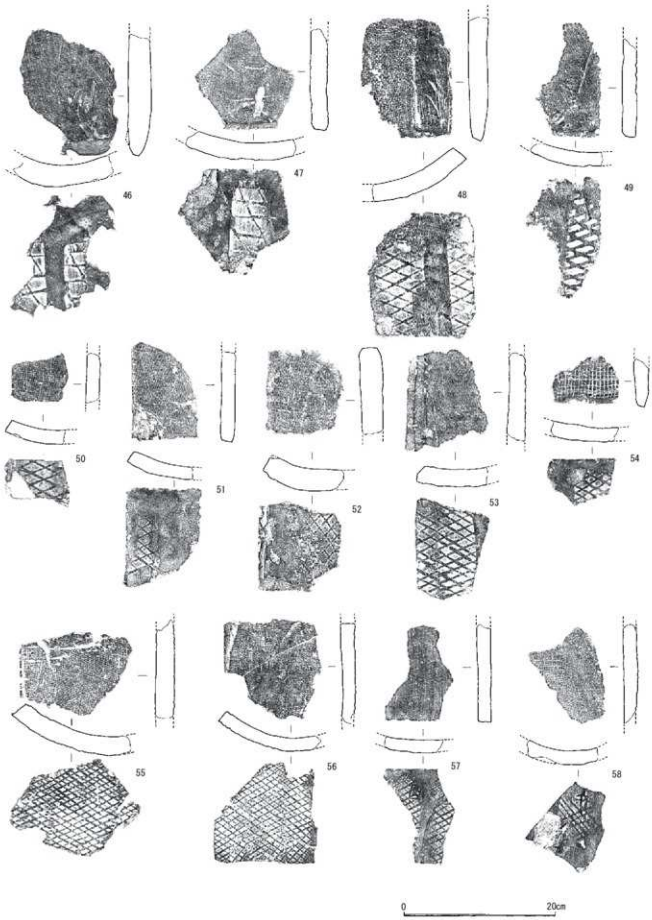


図 13. 24SX005 灰茶色土出土遺物実測図④（1/5）

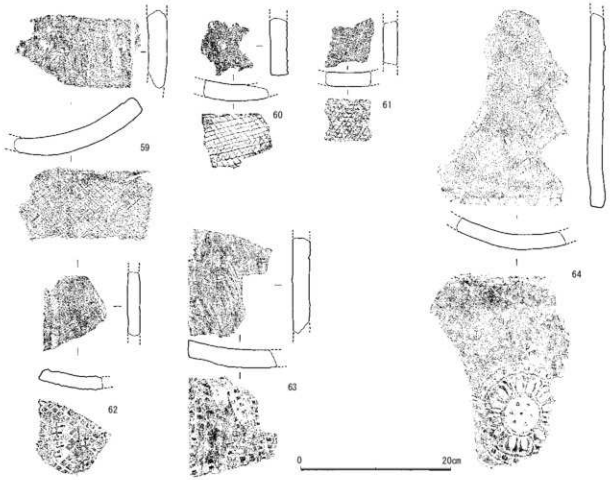


図 14. 24SX005 灰茶色土出土遺物実測図⑤（1/5）

5.3cm、厚さ2.5cm。

石製品

砥石（13）　大きさが9.7×5.1×2.6cmで、3面使用している。砂岩製。

24SX005 茶色土（図15）

瓦類

平瓦（1）　縦35.2cm、横26.2cm、厚さ2.2cm。凸面は縄目叩きである。胎土は砂粒を多く含むが、キメは細かい。焼成はやや不良で、白黄橙色を呈する。凹面の両端はヘラケズリし、面取りしている。

24SX005 暗茶色土（図15）

瓦類

平瓦（2～4）　凸面は縄目叩きで、凹面には布目痕を残す。2は横24.2cm、厚さ2.2cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良で、乳白色や淡黄色を呈する。凹面の片方端はヘラケズリし、面取りしている。3は凹面端をヘラケズリし、面取りしている。焼成はやや不良で、淡灰色を呈する。4は摩滅するが、凹面に糸切り痕と模骨痕を残す。また、凹面端はヘラケズリし、面取りする。

24SX005 明茶色土（図15）

須恵器

壺（5）　底部外面はヘラ切り未調整。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は良好で青灰色を呈する。底径13.1cm。

その他の出土遺物（図16）

遺構の時期に直接関係ない、古代より古い遺物を抽出した。

弥生土器

甕（1・2）　1は復原底径8.0cm。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良で淡黄灰茶色を呈する。SX005茶色土よ

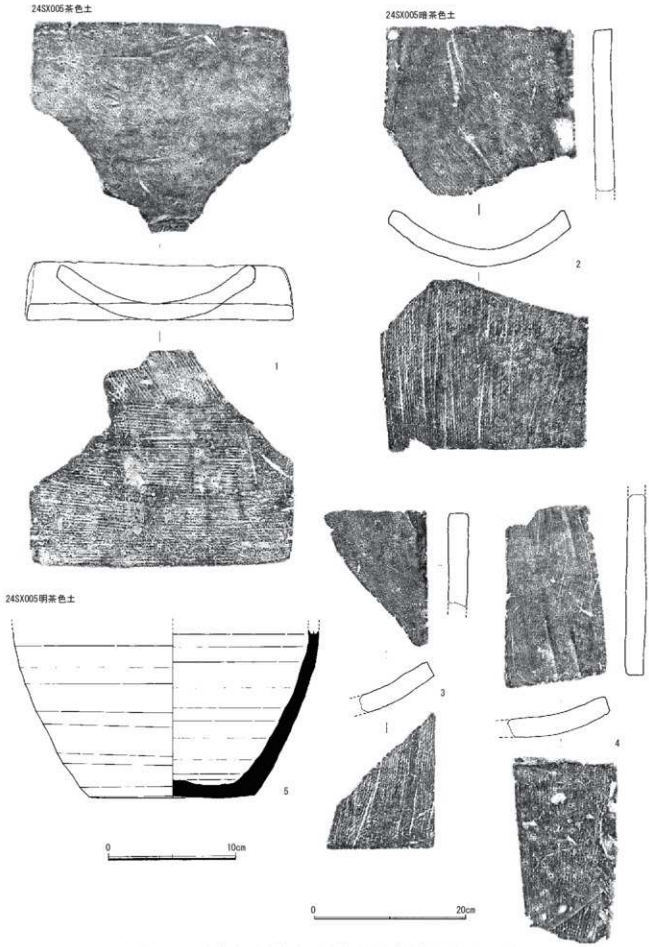


図 15. 24SX005 茶色土・暗茶色土・明茶色土出土遺物実測図（1/5、1/3）

り出土。2は若干高台状になっていて、摩滅が著しいが、外面には僅かに指頭圧痕が残る。復原底径14.0cm。胎土は砂粒を多く含み粗い。焼成は不良で、外面暗茶灰色、内面白橙色を呈する。SX005より出土。

石製品

石包丁（3）　中央付近の破片で、穿孔が2個ある。幅3.5cm、厚さ0.45cm。輝緑凝灰岩製。SX005茶色土より出土。

剥片（4）　大きさは5.6×4.0×1.1cm。安山岩製。SX001灰茶色土より出土。

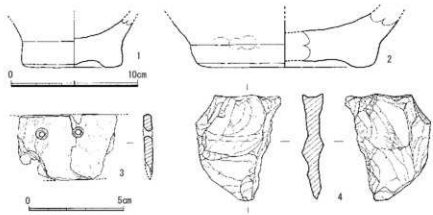


図16. 第24次調査その他の出土遺物実測図（1/2、1/3）

5. 小結

24SX025出土瓦の傾向

出土遺物の大半を瓦が占めていた。その殆どが破片で、それぞれ摩滅も著しい状況であった。特に縄目叩きの平瓦の摩滅が目立ち、逆に丸瓦の焼成は良好であった。24SX025（SX001とSX005）に廃棄された瓦の出土傾向をみるため、表3のように大きく縄目叩きと格子叩きに分け、破片の重量を示した。格子叩きについては、今回は単純に格子の一辺の長さ（格子の大きさ）によって分類し計測を行った。

表3でわかるように、瓦総重量1326kgのうち、平瓦が9割を占める状況で、その中でも縄目叩きの平瓦が約56%であった。平瓦と丸瓦では完形品に重量差があるため、完形の瓦の重量を数点計量し、平均的な完形品の重量を求めた。もちろん、同じ叩き具を用いた瓦でも大きな重量差があるため、あくまでも参考程度の数値と考えて頂きたい。これを基に出土した瓦の枚数を割り出すと、平瓦（縄目）は168枚、平瓦（格子）は28枚、平瓦（無文）は10.8枚、丸瓦（縄目）は10.4枚、丸瓦（格子）は5枚、丸瓦（無文）は8枚という計算になり、軒瓦や不明瞭な瓦を除いた瓦の約7割が、縄目叩きの平瓦であることが理解できる。

西外郭線

調査前に予想された国分寺の西外郭ラインの遺構が確認された。南側の第21次調査で、柵列（21SA075）の柱間は約4.2mとやや間隔が広かったため、今回の調査で検出した柵列（24SA010）と一連のものかについては、検討を要する。

また、それぞれ検出範囲が短

図17. 遺構略測図（1/100）

表 1. 検出遺構任意中点座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値				方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
24SA010	a柱穴中点	57455.82	-45689.06	-61.617	-92.256	N-3° 16′ 49″ -E
	c柱穴中点	57462.45	-45688.68	-54.978	-92.107	
24SD015	北端任意中心	57464.04	-45690.35	-53.447	-93.832	N-3° 34′ 35″ -W
	南端任意中心	57461.64	-45690.20	-55.840	-93.598	
24SD020	溝東肩北端	57464.05	-45692.90	-53.526	-96.381	N-3° 20′ 25″ -E
	溝東肩南端	57461.48	-45693.05	-56.100	-96.441	

X方向の－値は国分寺講堂から南へ移動したことを示す
Y方向の－値は中軸線から西へ移動したことを示す

国分寺中軸線方位
N-2° -E

講堂中点座標 X＝57514.18
Y＝-45594.71

いため、方位についても僅かな測点の違いによって、計算値が異なってくる。幾つか柵列に該当するような柱穴があり、今後周囲の調査事例をもとに検討していかなければならないが、大きく捉えた場合、21SA075の延長上に24SA010が続いており、この付近が西側外郭線であることはほぼ間違いないだろう。しかし、柵列の時期については、遺物が全く出土していないため不明である。

柵列に西側には0.5～0.8mの空間をあけて、柵列に平行する落差0.6mほどの段落ち（SX025）が検出された。その段下には2本の浅い溝があり、今回の調査面積ではその根拠に乏しいが、幅約1.8m程の通路のようなものが寺域に接して南北に続いていた可能性も考えられる。段落ちに廃棄された瓦礫（SX005）に14世紀代の遺物が混じっていることから、この頃までは外郭線が存在したかもしくは境界の意識が残っていたと考えられるが、柵列と段落ちが同時に存在していたのか、柵列が14世紀まで存在していたのかは不明瞭である。ちなみに、現在でも今回の調査区の西隣は市道が通り、その西側は市道より一段低い状況を残している。　（宮崎亮一）

表 2. 遺構一覧

S-番号	遺構番号	遺構性格	堆積土	先後関係	埋没時期	地区番号
1	24SX001	瓦廃棄列			14世紀以降	3ライン
2		ピット群				B1
3		ピット群				C1
4		ピット				C2
5	24SX005	瓦礫			14世紀	C3
6		ピット				C1
7		ピット群				A2
8		ピット				B2
9	24SX009	柱穴				A2
10	24SA010	柵列			奈良時代？	2ライン
11		ピット群				C3
12		ピット		掘り方検出後、S-10cで実測。		C3
13	24SX013	ピット		遺物なし		B2
14	24SX014	ピット		遺物なし		B2
15	24SD015	溝		トレンチ内。西外郭線の溝？。瓦はS-5淡茶色土で取り上げ	奈良時代？	C2
20	24SD020	溝？				C2
25	24SX025	段落ち			14世紀以降	A～D3

表3 SX025（SX001・SX005）瓦の出土量

24SX001　平瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒平瓦	その他	不明瞭	平瓦合計
S-1	17123.1	0	0	229.2	1086.7	0	98.5	0	14543	639.8	0	0	0	1621.6	35141.6
S-1K系色土	35435.9	131.1	1317.9	1403.1	1616.9	355.2	155.5	0	479.9	2038	0			27955.3	70888.7
S-1暗茶色土	2493.1	0	0	0	67	0	0	0	0	66.1	0	0	0	3135.6	5761.6
24SX001全体合計															
重さ(g)	55052	131.1	1317.9	1632.3	2770.6	355.2	254	0	14822.9	2743.6	0	0	0	32712.3	111793.9
割合(%)	45.77	0.11	1.09	1.36	2.30	0.30	0.21	0.00	12.32	2.28	0.00	0.00	0	27.20	92.99

格子合計(g) 21294
格子割合(%) 17.70

24SX001　丸瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒丸瓦	その他	不明瞭	丸瓦合計	総重量
S-1	838.1	0	0	140.9	253.9	0	0	0	1287.6	407	0	0	0	66.1	2973.8	38115.4
S-1K系色土	1634.1	0	0	0	287.2	0	0	0	432.7	630.2	0			1955.3	4934.7	75823.4
S-1暗茶色土	178.3	0	0	0	0	0	0	0	332.1	0	0	0	0	58.6	569	6332.6
24SX001全体合計																
重さ(g)	2650.6	0	0	140.9	541.2	0	0	0	1720.3	1369.2	0	0	0	2075.3	8477.5	120271.4
割合(%)	2.20	0.00	0.00	0.12	0.45	0.00	0.00	0.00	1.41	1.14	0.00	0.00		1.73	7.05	

格子合計(g) 2382.1
格子割合(%) 1.98

24SX005　平瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒平瓦	その他	不明瞭	平瓦合計
S-5暗茶色土	26963.4	0	0	0	0	0	0	0	0	768.1	1194.8	0	9589.8		38515.1
S-5茶色土	17996.9	206.6	0	0	0	0	0	0	301.3	0	0	0	9290		27794.8
S-5暗茶色土	35226.6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11832.2		47058.8
S-5暗灰色土	8439.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1203		9642.3
S-5K粘色土	22175.8	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7830.2		30005.7
S-5	159363.3	1690.2	3763	2213.4	8258.6	715.4	0	199.9	561.4	11259.7	1094.8	514.6	82084.6		271160.9
S-5K系色土	415977.8	1706.6	7042.3	6136.7	23013	555.5	0	2186.8	3435.3	32363.6	3153	1227	204578.3		703379.9
24SX005合計															
重さ(g)	686042.8	3603.4	10805.3	8353.2	33273.6	1270.9	0	2386.7	3996.7	44692.7	5444.6	1741.7	326609.1		1127619.3
割合(%)	56.88	0.30	0.90	0.69	2.76	0.11	0.00	0.20	0.33	3.71	0.45	0.15	27.08		93.48

格子合計(g) 63388.9
格子割合(%) 5.23

24SX005　丸瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒丸瓦	その他	不明瞭	丸瓦合計	総計
重さ(g)	27593.6	117.6	607.3	693.0	6309.2	0	0	0	0	1491.2	6642.3	0	19783.2	78662.1	1206151.6
割合(%)	2.29	0.01	0.05	0.06	0.52	0.00	0.00	0.00	0.00	1.24	0.72	0.00	1.64	6.52	

格子合計(g) 7726
格子割合(%) 0.64

24SX025合計　平瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒平瓦	その他	不明瞭	平瓦合計
重さ(g)	741094.9	3124.9	12123.3	9994.6	36044.2	1626.1	254	2386.7	18619.6	67436.9	5444.6	1761.7	359121.4	1239033.4	
割合(%)	61.87	0.26	0.91	0.75	2.72	0.12	0.02	0.18	1.42	5.08	0.41	0.13	27.09	93.43	
瓦片枚数(枚)	168.43	1.04	4.04	3.33	12.01	0.54	0.08	0.80	6.27	15.61	—	—	—	212.37	
枚数割合(%)	71.27				11.92					6.70	—	—	—		

格子合計(g) 84372.9　格子枚数　28.12
格子割合(%)　6.36

特定部品重量　平瓦(縄目)…4.6kg
平瓦(格子)…3.0kg

※格子のcm2斜格子の一辺の長さ

24SX025　丸瓦

重さ(g)	縄目	桶子 太い格子(大)	1.5cm～(大)	1～1.5cm(中)	1cm以下(小)	正格子	斜格子	斜格子	撚文	不明瞭	無文	軒丸瓦	その他	不明瞭	丸瓦合計	総計
重さ(g)	30244.3	117.6	607.3	424.8	6850.3	0	0	0	1720.3	2162.5	6642.3	0	21838.3	87139.6	1326393.0	
割合(%)	2.28	0.01	0.05	0.03	0.52	0.00	0.00	0.00	0.13	0.16	0.50	0	1.64	6.57		
瓦片枚数(枚)	10.43	0.06	0.30	0.42	3.43	0.00	0.00	0.00	0.85	0.14	—	—	—	23.63	235.99	
枚数割合(%)	4.42				2.01					3.45	—	—	—			

格子合計(g) 9502.8　格子枚数　4.75
格子割合(%) 0.72

特定部品重量　丸瓦(縄目)…2.0kg
丸瓦(格子)…2.0kg

2. 筑前国分寺跡　第26次調査

1. 調査に至る経過

平成8年1月に国分3丁目78－1について、地権者である平嶋政樹氏より、田普請を目的とした表土削り取りおよび盛土造成に関わる埋蔵文化財取り扱いの有無の問い合わせが本市教育委員会へなされた。当該地は、周知の遺跡である筑前国分寺跡に属し、推定西側外郭施設延長箇所に該当するため、確認調査が必要であると判断され、同年2月6日に本市教委による確認調査を実施した。その結果、奈良期に関わる河川と判断できる遺構が確認でき、かつ先に記した筑前国分寺跡西側外郭施設延長箇所であることから、田普請造成の前に範囲確認のための調査が必要として協議を行い、平成11年11月から調査を開始することで合意した。調査期間は、平成11年11月4日から同年12月28日で行い、開発対象面積は1,323㎡、調査面積は233.5㎡を測る。なお調査後、当該地には調査箇所を含め埋蔵文化財が保存されている。

2. 基本土層

現耕作土上面より、約0.5m～0.6mほどで、砂ならびに礫包含の砂層が確認できる。この砂および礫包含砂層は、河川堆積層と考えられ、この堆積層中に今次報告の遺物が包含されていた。したがって、今次調査地の所見としては、国分瓦窯跡前面に展開する谷地形の西側延長線上に立地することから、河川氾濫地に該当する

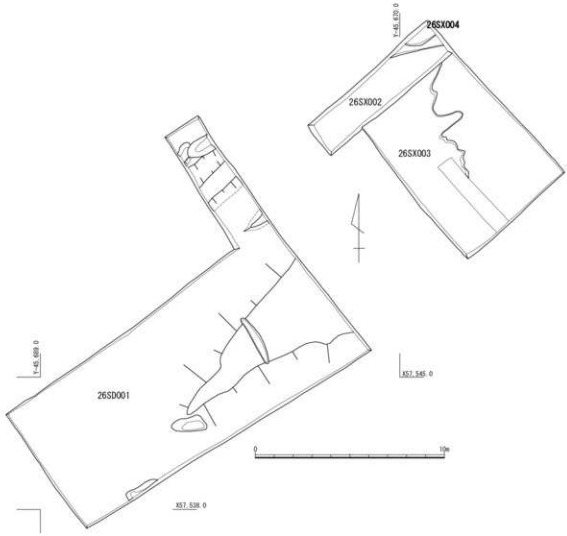


図18. 遺構配置図（1/200）

ものと考えられる。堆積層を除去すると約 0.4m ～ 0.5m ほどで基盤層と考えられる黄茶色土層が確認できる。

表 4. 26SD001 土層一覧

黄茶色礫【遺構検出時】	
■26SD001	■26SX002・26SX003他
茶褐色土	黄褐色土
暗灰色中粒砂～白色粗粒砂	26SX002
暗緑灰色中粒砂	26SX003
暗灰色粗粒砂	
暗灰色礫	
白色粗粒砂	
灰色礫	
暗灰色砂	
黄茶色礫	

3. 遺構

調査区のほぼ全域に河川堆積層が覆い被さっており、検出状況から便宜的に遺構番号を付与した。なお調査都合により、水田畦畔により調査区を二分している。ここでは北東調査区－南西調査区として報告する。

河川

26SD001

南西調査区のほぼ全面を覆う堆積層で、遺構規模は調査区外へ広がっていることから明らかにし難い。堆積層の層序関係は、表 4 に示した。現代の遺物が僅かに混入しているものの、おおむね中世後期に収まるものと考えられ、度重なる洪水層の堆積というよりは、一時期の洪水層を検出したものと考えることができる。瓦出土傾向については、後述する。

その他の遺構

26SX002

北東調査区にて検出したもので、前述した 26SD001 の堆積層の違いを区別した可能性も残る。

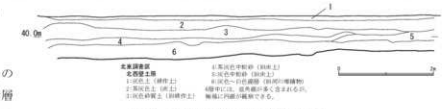


図 19. 調査区北壁土層実測図 (1/80)

遺構規模については、調査区北西側へ広がる可能性があり、明らかにし難い。灰色中粒砂が堆積していた。

26SX003

北東調査区にて検出したもので、26SX002 に切られるように検出できた。この遺構に関しても、26SD001 の堆積層の一部である可能性が残る。調査区内で検出できた範囲では、幅約 1.5m ほどを測り、長さについては調査区外へ延びることから明らかにし難い。遺構内には、灰色から白色の礫混じり砂が堆積していた。

26SX004

南西調査区の南東部にて検出した遺構で、調査区北東辺に平行にあることから、水田湿抜きを確認した可能性がある。

（中島恒次郎）

4. 遺物

現代の染付け皿を最新の遺物とするが、それ以前は大きく隔たり、中世後期、室町期に位置付けられる遺物が出土している。これらに混在するように各種瓦類が出土しており、これらも現代的な瓦ではなく、おおむね奈良から平安期に帰属するもので占められている。

河川

26SD001（図 20）

26SD001 茶褐色土

土師質土器

鍋 (1)　口縁部のみの破片資料で、内外面にハケ調整痕跡が観察でき、外面下位には煤状炭化物が付着している。口縁部をやや外反させる鉄鍋模倣土器を考えられる。

26SD001 暗灰色中粒砂

土師質土器

鉢 (2)　口縁部のみの破片で、全形が判然としない。外面には叩き痕跡ならびに指頭圧痕を残し、内面には回

転ナデ痕跡が観察できる。

26SD001 暗灰色粗粒砂

中国陶器

壺 (3)　底部の破片資料のため、詳細な型式認定が困難である。内外面に強い回転ナデ痕跡をとどめ、体部外面下位まで暗茶褐色の釉を施している。素地分類ではB群に入るものと考える。

青磁

椀 (4)　やや厚めに濁った黄緑色の釉薬を掛け、素地は微細な白色粒子を少量含み、白灰色を呈している。釉厚から龍泉窯系青磁椀Ⅳ類の範疇に入るものと考える。

瓦

平瓦 (5)　凸面に「平井」文字とともに陰文化した斜格子叩きを残し、凹面には布痕跡が観察できる。側面のみ残存するため全体法量を計測するには至っていない。大宰府史跡分類の901Fa型式に該当するものと考えられる。

軒平瓦 (6)　瓦当部分のみの残存資料で、中心飾りを欠失した右辺のみのものと推定でき、唐草が摩耗しつつも僅かに観察できる。唐草のみから判断することは困難かもしれないが、大宰府史跡分類の637型式に該当するものと考えられる。

軒丸瓦 (7)　瓦当部分の破片資料で、かなり痛んだ瓦笵であったようで中房が摩耗している。文様構成から大宰府史跡分類の290B型式に該当するものと考えられる。

石製品

石鍋 (8)　やや小形のもの。口縁部から体部下位までを残す破片で、把手を一つ残している。内外面ともに丁寧な削りによって成形されており、観察できるだけで二箇所に穿孔痕跡が観察できる。煤の付着は確認できない。また把手も一箇所のみが残っているだけで、双耳か四耳かの区別はつかない。森田分類A群に該当する。

26SD001 暗灰色礫

須恵質土器

鉢 (9・10)　両者とも口縁部のみの破片資料で、9は体部上位から口縁部への移行箇所で内方へ屈曲させる特徴をもつ。内外面ともに回転ナデ痕跡をとどめており、口縁部外面に粘土紐痕跡が観察できる。10は、口縁端部をやや肥厚させる特徴を有し、口縁端部外面が黒灰色に変色している。東播磨系のものと考えられる。

瓦質土器

こね鉢×擂鉢 (11)　口縁部のみの破片で、摺り目の有無が観察できない。内面には横方向のハケ痕跡が、外面には指頭圧痕が多く残る。

国産陶器

擂鉢 (12)　体部のみの破片で、内面に7条を一単位とする摺り目が観察できる。素地特徴から備前系のものと判断できる。内面には調整痕跡が欠失した箇所が観察でき、この部分が使用されたと判断される。

鉢 (13)　口縁部のみの破片資料で、口縁部外面へ肥厚する特徴を有し、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。産地については不明。

朝鮮系無釉陶器

壺 (14)　口縁端部の破片資料で、断面色調が赤灰色を呈し、微細な白色粒子を少量含む他は緻密さを有していることから、朝鮮系無釉陶器と判断した。内外面には降灰による付着物が覆っている。

瓦

軒平瓦 (16)　瓦当のみの破片資料で、全体法量は計測できない。中心飾りから右辺が残るもので、均等唐草文および上部に珠文、下位に鋸歯文を描く。大宰府史跡分類の637型式に該当するものと考えられる。

石製品

砥石 (15)　緑色片岩の自然礫を利用したもので、一面に使用痕跡が残っている。

26SD001 白色粗粒砂

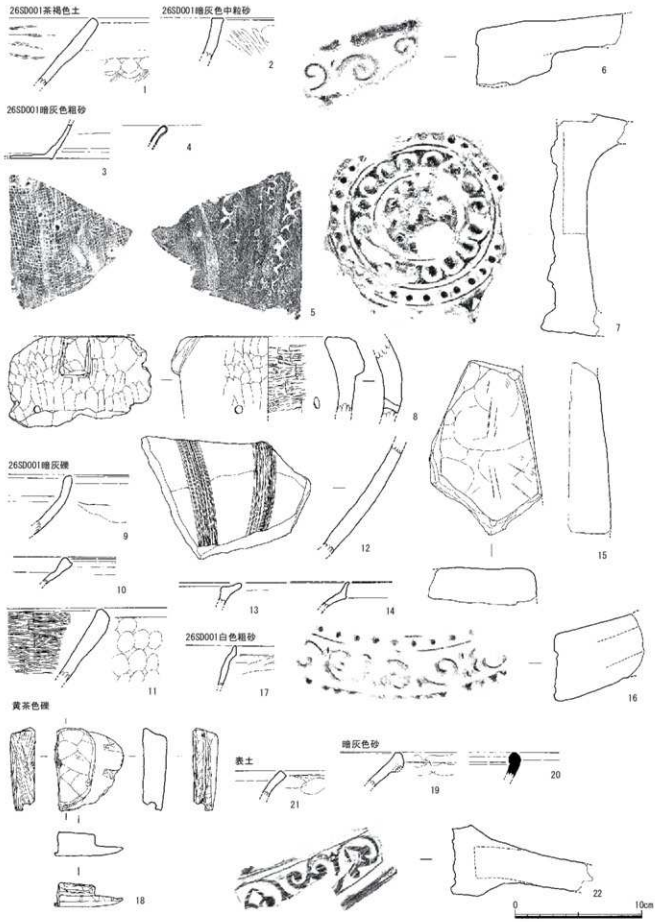


図 20. 出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

壺（17）　口縁部の破片で、端部を上方へ立ち上げる形状をもつ。外面には口縁部形成のための絞り痕跡をとどめている。

土層出土遺物

表土（図20）

須恵質土器

こね鉢（21）　口縁端部の破片資料で、口縁部外面に粘土粒様のものが貼り付いている。ただし小破片であることから、普遍的なものであるかどうかの判断はつかない。内外面ともに回転ナデにて調整されているが、外面には指頭圧痕が観察できる。

瓦

軒平瓦（22）　瓦当部分から平瓦の一部にかけての破片資料で、中心飾りの欠如した均整唐草文であると考えられる。国分寺において最も新規に該当する軒平瓦とされるもので、大宰府史跡分類686A型式に該当すると考える。

黄茶色礫層（図20）

石製品

用途不明製品（18）　石鍋の二次加工品と考えられ、外面と推定できる箇所に煤状炭化物が付着している。二次加工時の削り痕跡が全面に残されている。滑石製。

暗灰色砂層（図20）

須恵質土器

こね鉢（19・20）　いずれも口縁部の破片資料で、19は口縁部外面を肥厚させ、口縁部外面を暗灰色に変色している。東播磨系須恵器こね鉢と考えられる。20は、丸みを有する口縁部形状を有し、口縁部内面にやや窪みを持つ。微細な黒色粒子を少量混入するものの、緻密な胎土特徴を有している。これらの特徴から篠窯産須恵器と考えられる。（木川美穂子）

5. 小結

筑前国分寺跡西外郭施設を確認する目的で調査を開始したが、中世後期堆積の河川を確認したにとどまった。当該地は国分寺推定寺域内において、最も標高が低い土地であり、かつ自然地形上、谷地形内に存在していることから、河川氾濫によって欠失した可能性がある。調査区内出土瓦の破片数量法による計測では、縄叩き－格子叩きの比率にさほど顕著な差もなく、丸瓦－平瓦の比率で若干の開きがあるものの、定量化の限界を考えた時、これらの数値に含まれる意味に何ほどのものがあるのかは不安がある。しかし、縄叩き－格子叩きの破片数にさほど開きがなかったことは、般若寺跡での分析と比較してみると、国分寺の存続期間を考える上で示唆的であると考える。いわば奈良期の瓦で終息する般若寺と平安期までの瓦を出土する国分寺の傾向差が観察できる。一方室町期までの遺物を包含するにもかかわらず、当該期の瓦が出土していない点も注意すべきであり、当該期には国分寺周辺城における瓦使用建物が存在していなかった可能性が生じてくる（表5）。この点に関しては、国分寺東方に所在する辻遺跡でも同様であり、筑前国分寺周辺城の土地利用状況を考える上で、貴重な資料を得ることができた。（中島恒次郎）

表5. 瓦出土傾向

遺構　表土

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	8	31	23	62
丸瓦	1	1	19	21
不明	2	3	55	60
			合計	143

遺構　26SD001白色粗粒砂

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	4	8	11	23
丸瓦	1	2	11	14
不明	1	2	12	15
			合計	52

遺構　黄茶色礫

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	7	14	8	29
丸瓦	3	3	10	16
不明	0	0	11	11
			合計	56

遺構　26SD001灰色礫

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	3	1	4	8
丸瓦	4	0	0	4
不明	1	0	6	7
			合計	19

遺構　26SD001茶褐色土

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	0	1	1	2
丸瓦	0	0	6	6
不明	0	1	4	5
			合計	13

遺構　26SX002

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	0	0	0	0
丸瓦	0	0	0	0
不明	1	0	0	1
			合計	1

遺構　26SD001暗灰色中粒砂～白色粗粒砂

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	1	0	2	3
丸瓦	0	0	0	0
不明	0	0	0	0
			合計	3

遺構　26SX003

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	0	0	0	0
丸瓦	0	0	1	1
不明	1	1	5	7
			合計	8

遺構　26SD001暗緑灰色中粒砂

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	1	1	2	4
丸瓦	3	1	5	9
不明	0	1	20	21
			合計	34

遺構　26SX004

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	0	0	0	0
丸瓦	0	0	0	0
不明	0	0	2	2
			合計	2

遺構　26SD001暗灰色粗粒砂

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	32	63	31	126
丸瓦	12	6	38	56
不明	15	6	123	144
			合計	326

遺構　暗灰色砂

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	7	13	13	33
丸瓦	3	4	16	23
不明	2	1	36	39
			合計	95

遺構　26SD001暗灰色礫

	格子叩	縄叩	不明	小計
平瓦	29	57	37	123
丸瓦	14	8	52	74
不明	6	10	80	96
			合計	293

遺跡傾向

	格子叩	縄叩	不明	小計	割合
平瓦	92	189	132	413	64.8%
丸瓦	41	25	158	224	35.2%
不明	29	25	354	408	
合計	162	239	644	1045	
割合	40.4%	59.6%			

※叩き種別不明には擦り消しのものを含む。
※格子叩きには、老司系叩きは無い。

■叩き種別
小計【不明-不明を除外】　401　点

■瓦種別
小計【不明-不明を除外】　637　点

3. 筑前国分寺跡　第27次調査

1. 調査に至る経緯

太宰府市国分4丁目719-4において、専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財取扱いの有無に関する問合せが、平成13年7月に本市教育委員会文化財課へなされた。当該地は筑前国分寺跡の南東部隣接地に位置しており、寺域に関する遺構もしくは、寺域南辺に沿って走行する道路遺構が検出される可能性があり、寺域確認を目的とした調査を行う旨を地権者と協議し、また国庫補助を受けて調査を行うことになった。住宅建設にあたっては地下の遺構に影響のない基礎構造となるため、敷地全体の調査を行わず、必要箇所にトレンチを入れ遺跡確認を行うことになった。調査は宅地建築予定部分を避けた東西2ヶ所に南北方向のトレンチを設定した。

調査期間は平成13年10月4日～30日で、開発対象面積は329.10㎡、調査面積28.23㎡である。調査は、井上信正が担当した。

調査では両トレンチで東西溝を検出した。トレンチ以外の部分の遺構は保存されるため、遺構の性格を明確にするため、ここでは遺構を完掘した上、さらに掘り下げて地山状況の確認も行った。

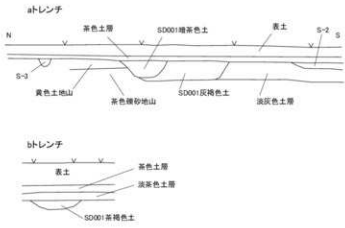


図21. 土層模式図

2. 基本土層

敷地東側に設けたaトレンチ東壁の土層観察では、地表面から約0.3m程度下までが表土層で、その下に茶色土層が0.1m程度堆積しており、これを除去すると遺構面が確認される。

西側のbトレンチ西壁の土層観察では、地表面から下約0.9m程度が表土層で、その下に茶色土層が0.2～0.3m程度堆積している。茶色土層の下位にはさらに淡茶色土層が0.3m弱程度堆積しているが、この上面では遺構は確認されず、これを除去するとSD001そして地山が検出された。

調査で遺構として捉えることができたものは3基である。なおaトレンチのSD001の南側（下位）に位置する淡灰色土層については平安時代後期の遺物が出土しているが、今回は遺構として捉えきれなかった。この層は砂質土系の埋土で、概ね10cm前後の層厚を持つものが数層重なっている。この延長上のbトレンチでは地山が露出しており、現状では局所的な堆積層としか述べることができない。検出範囲も狭くその詳細については不明な点が多いが、その位置や埋土状況から道路通行痕跡の可能性も窺われるところである。道路に関する遺構かどうかは今後の周辺調査を待ちたい。

なお、地山面はaトレンチでは標高47.50～48m前後で検出されるのに対し、bトレンチでは標高47m程度で検出された。このことにより地山面自体が概ね3°ほどの傾斜して西に下っていることがわかる。現地形も東側が高く西側が低くなっており、旧状を踏襲しているのであろう。基盤層は周辺同様、砂礫を多く含む層と主体としている。

3. 遺構

1) 溝

27SD001

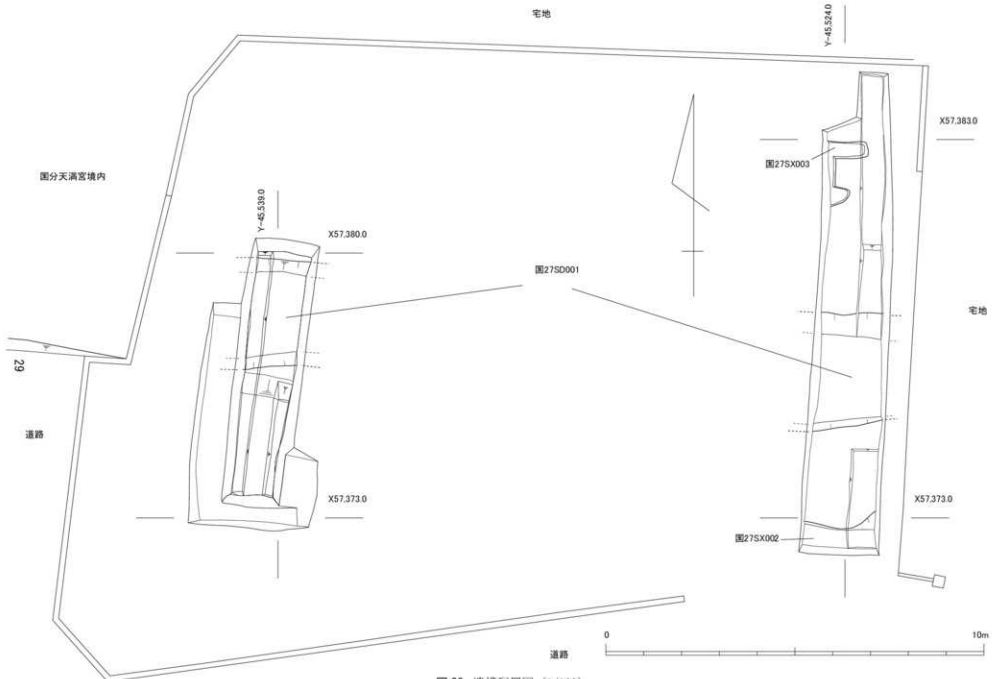


図 22. 遺構配置図（1/100）

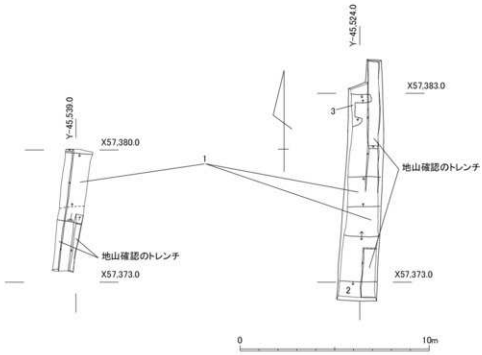


図 23. 遺構略測図（1/200）

a・b両トレンチで検出した東西に走行する溝である。両トレンチで検出した遺構それぞれが繋がる確実な証拠は得られていないが、遺構の規模・走行方向、そして大まかな埋土の状況から、同一遺構と判断している。検出長は16.77 mとなる。aトレンチでは幅3.13 m、深さ0.35～0.4 m、bトレンチでは幅2.91 m、深さ0.3～0.4 mを測る。いずれの溝底も平坦である。ただ地山同様に溝自体も西に向って傾斜しているが、流水痕跡は確認されておらず、埋土中には礫が目立つ程度である。aトレンチでは埋土は上から暗茶色土、灰褐色土の順であり、そこから出土した最新時期の遺物で遺構埋没時期を想定すると、暗茶色土は12世紀中頃以降（同安窯系青磁皿出土）、灰褐色土は平安時代前期と判断される。bトレンチでは茶褐色土が堆積しており、出土した最新の遺物からは平安時代前期に埋没した可能性が窺われるところである。この他に出土した遺物も加えて総合すると、奈良時代から平安時代前期にかけて機能した溝と想定している。

2) 溝×土坑

27SX002

aトレンチ南端で検出した遺構である。深さ約0.2 m、幅0.5～1 mを検出した。SD001の走行方向に規制された遺構の可能性が窺える。ここからは平安時代前～中期を最新とする遺物が出土している。

4. 遺物

1) 溝出土遺物

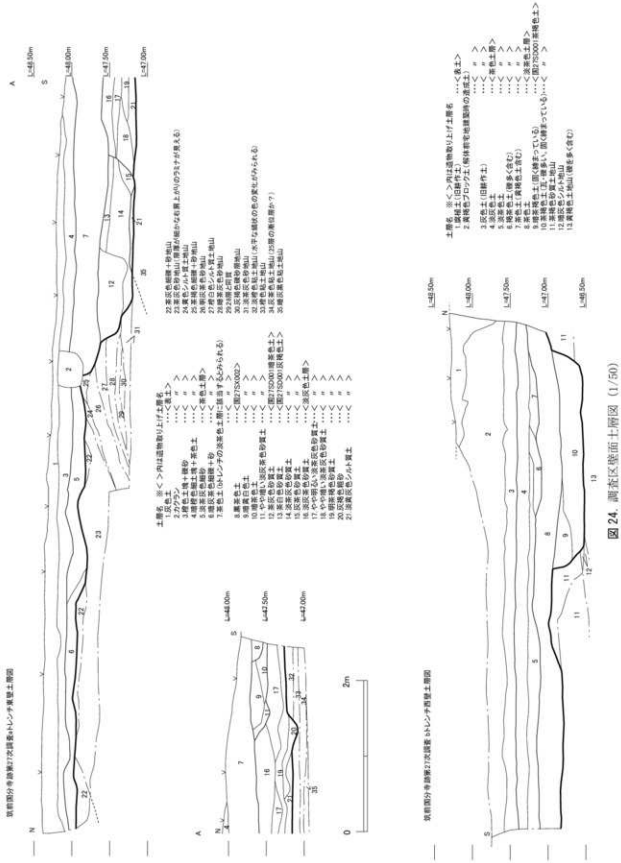
27SD001

27SD001 暗茶色土（図25）

土師器

小皿 a1(1)　口径8.2cm、器高1.0cm、底径6.6cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。暗褐色を呈す。内外面に油煙が付着している。

同安窯系青磁


筑前国分寺跡第27次調査トレンチ東壁土層図
A
S
N
L=49.50m
L=49.00m
L=48.50m
L=48.00m
L=47.50m
L=47.00m
L=46.50m
土層名（＜＞内は遺物取り上げ土層名）
1.表土
2.クラン
3.褐色土（黒っぽい）
4.褐色土（黒っぽい中茶色土）
5.淡黒色土（褐色）
6.淡黒色土（褐色）
7.黒色土（トレンチ中の淡黒色土間に挟まれるようにみられる）
8.黒茶色土
9.黒黄色土
10.やや白っぽい淡黒色砂質土
11.淡黒色砂質土
12.淡黒色砂質土
13.黒黒色砂質土
14.淡黒色砂質土
15.淡黒色砂質土
16.淡黒色砂質土
17.やや白っぽい淡黒色砂質土
18.やや白っぽい黒色砂質土
19.明黒色砂質土
20.灰黒褐色砂
21.淡黒色シルト質土
22.淡色褐色土（中粒）
23.淡色褐色砂（粗砂が細かな粘土がのりウストが見える）
24.淡黒色シルト質土（粘土）
25.淡黒色砂質土
26.明淡色砂質土
27.淡黒色砂質土
28.淡色褐色砂質土
29.淡色褐色砂質土
30.淡色褐色砂質土
31.淡色褐色砂質土
32.淡色褐色砂質土
33.淡色砂質土
34.淡色褐色砂質土
35.淡黒色砂質土
36.淡黒色砂質土
37.淡黒色砂質土
38.淡黒色砂質土
39.淡黒色砂質土
40.淡黒色砂質土
41.淡黒色砂質土
42.淡黒色砂質土
43.淡黒色砂質土
44.淡黒色砂質土
45.淡黒色砂質土
46.淡黒色砂質土
47.淡黒色砂質土
48.淡黒色砂質土
49.淡黒色砂質土
50.淡黒色砂質土
51.淡黒色砂質土
52.淡黒色砂質土
53.淡黒色砂質土
54.淡黒色砂質土
55.淡黒色砂質土
56.淡黒色砂質土
57.淡黒色砂質土
58.淡黒色砂質土
59.淡黒色砂質土
60.淡黒色砂質土
61.淡黒色砂質土
62.淡黒色砂質土
63.淡黒色砂質土
64.淡黒色砂質土
65.淡黒色砂質土
66.淡黒色砂質土
67.淡黒色砂質土
68.淡黒色砂質土
69.淡黒色砂質土
70.淡黒色砂質土
71.淡黒色砂質土
72.淡黒色砂質土
73.淡黒色砂質土
74.淡黒色砂質土

皿（2）　底部の破片である。残存高0.8cm、底径5.0cmを測る。皿I-2b類。

瓦類

丸瓦（3・4）　3は文字瓦で、厚さ1.9cm、瓦質に仕上がる。凸面は「介」字を記す横長斜格子叩き（I-Cb類）を施す。凹面は布目痕がみられる。九歴文字瓦分類912型式。4は玉縁との境の破片である。厚さ1.6cmで瓦質に仕上がる。凸面は大きめの横長斜格子叩き（I-Cc類）を施す。凹面は布目痕がみられる。

平瓦（5）　小口の端部が残存している。厚さ1.5cmで、須恵質に仕上がる。凸面は、所々に長軸方向の罫線が入る正格子叩き（I-Ab類）を施す。凹面は布目痕がみられる。なお小口はヘラ切りで調整している。

27SD001 灰褐色土（図25・26）

土師器

坏a（6・7）　6は底部の破片である。残存高1.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。淡灰白橙色を呈す。7は底部の破片である。残存高1.1cm、底径8.2cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。淡灰褐色～淡橙色を呈す。

黒色土器A類

椀c（8）　底部の破片である。残存高1.9cmを測る。淡灰乳白色を呈す。摩耗が著しい。

瓦類

平瓦（9～11）　9は厚さ1.6cmで、瓦質に仕上がる。凸面は横長斜格子叩き（I-Cb類）で、格子の一部が凹刻となるものである。凹面は布目痕がみられる。10は小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ2.3cmで、瓦質に仕上がるが焼成はあまい。凸面は4.5cm四方を一単位とするとみられる正格子叩き（I-Aa類）を施す。凹面は布目痕がみられる。端部はいずれもヘラ切りしている。11も小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ1.8cmで、瓦質に仕上がるが焼成はあまい。凸面は目の細かい正格子叩き（I-Aa類）を施す。凹面は布目痕がみられる。小口端部はヘラ切りで、側面端部は内面にヘラを入れた後割り離している。

丸瓦（12・13）　いずれも玉縁付近が残存している。12は厚さ2.5cmで、瓦質に仕上がるが焼成はあまい。凸面は目の細かい正格子叩き（I-Aa類）を施す。凹面は布目痕がみられる。小口端部はヘラ切りで、側面端部は内面にヘラを入れた後割りはなしている。13は厚さ1.6～1.9cmで、瓦質に仕上がるが焼成はあまい。凸面は大きめの横長斜格子叩き（I-Cc類）を施す。凹面は布目痕がみられる。側面端部は内面にヘラを入れた後割り離している。

軒平瓦（14）　均整唐草文の瓦当の破片である。瓦当部の厚さ4.5cmで、瓦質に仕上がる。上面は工具を当てて調整している。九歴分類637型式。

軒丸瓦（15）　瓦当の一部と格子叩きが観察される。瓦当は蓮弁部分しか残存していないが、複弁で間弁はない。九歴分類208Ba形式とみられる。格子叩きは縦長斜格子叩き（I-Bb類）を施す。凹面は布目痕がみられる。側面端部はヘラ切りを施す。

27SD001 茶褐色土（図27）

瓦類

平瓦（16・17）　いずれも破片である。16は厚さ1.6cmで瓦質に仕上がる。凸面は正格子叩き（I-Aa類）を施し、凹面は布目痕がみられる。17は厚さ1.6cmで瓦質に仕上がる。凸面は大き目の横長斜格子叩き（I-Ca類）を施し、格子内に「し」字の模様が入っているようである。凹面は布目痕がみられる。

丸瓦（18・19）　いずれも破片である。18は厚さ1.6cmで瓦質に仕上がる。凸面は横長斜格子叩き（I-Cb類）を施し、凹面は布目痕がみられる。側面端部は内面にヘラを入れた後割り離している。19は厚さ1.9cmで瓦質（硬質）に仕上がる。凸面は「介」字を記す横長斜格子叩き（I-Cb類）を施す。凹面は布目痕がみられる。九歴文字瓦分類912型式。凸面は横長斜格子叩き（I-Cb類）を施し、凹面は布目痕がみられる。

2）その他の遺構出土遺物

27SX002 茶色土（図27）

須恵器

円面硯（20）　大型の円面硯の破片である。最大残存径28cmで、陸部は21.8cm、海部の底は24.4cmを測る。

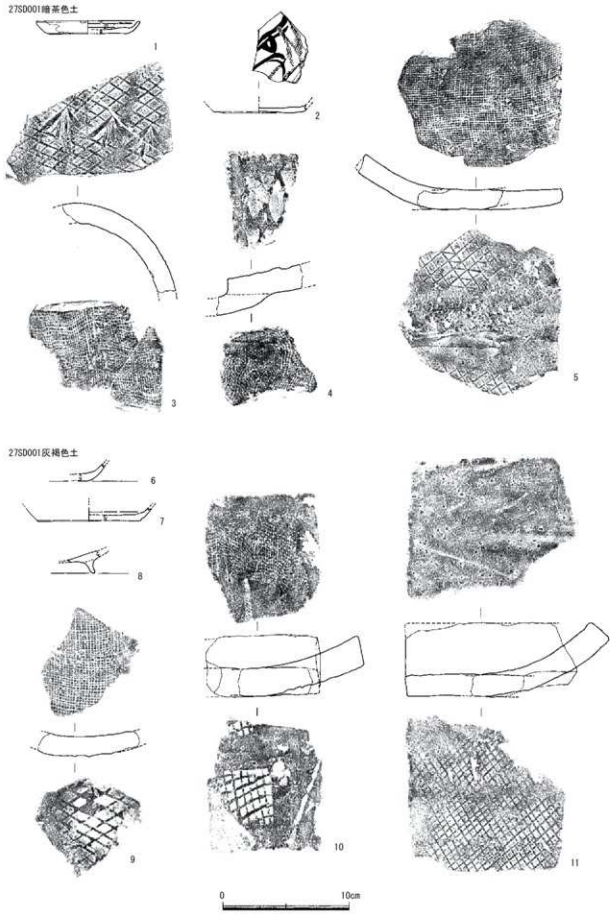


図 25. SD001 出土遺物実測図① (1/3)

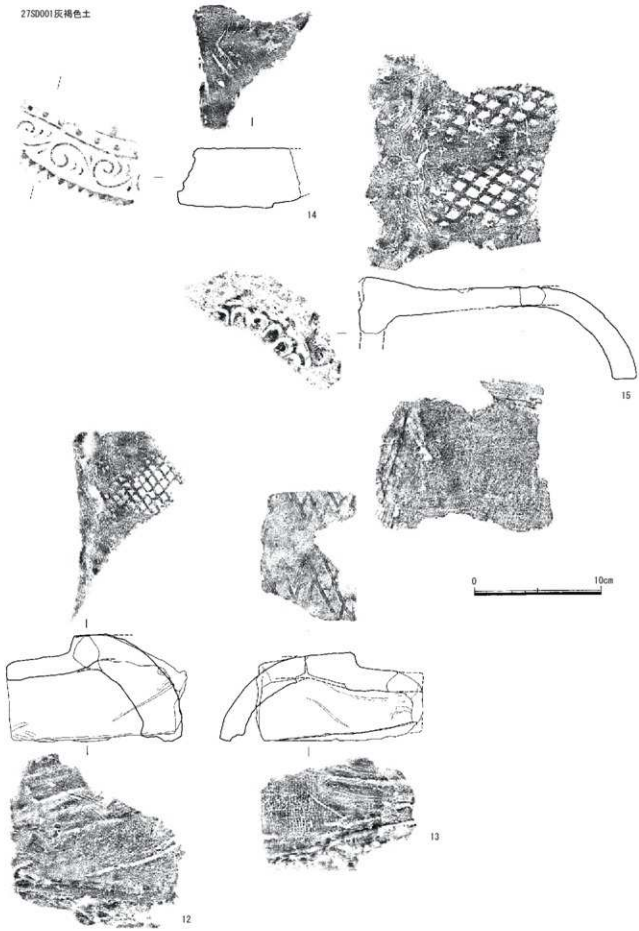


図 26. SD001 出土遺物実測図② (1/3)

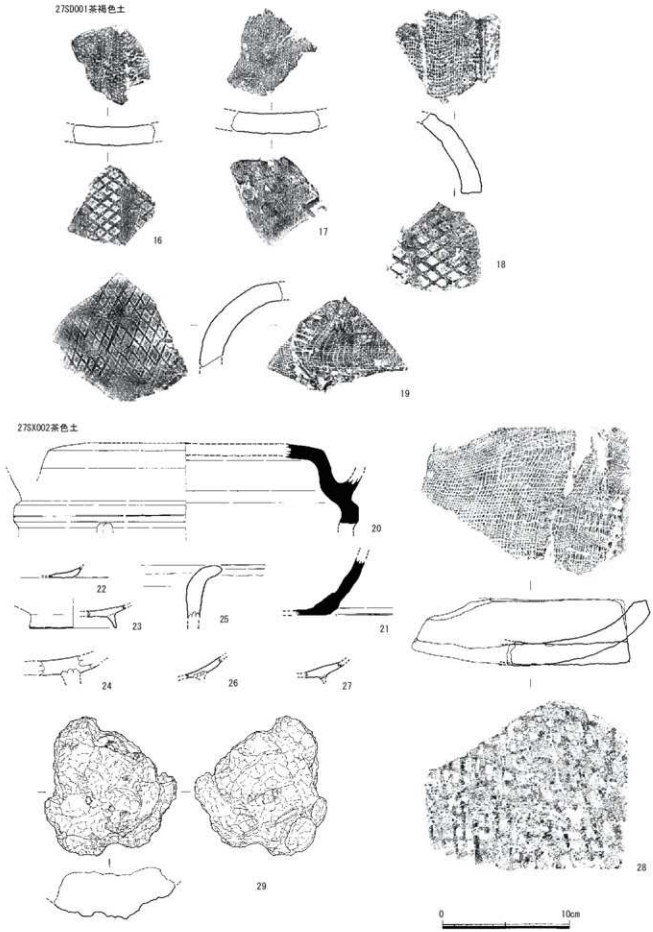


図27. SD001・SX002出土遺物実測図（1/3）

残存高は6.9cmで、陸部と海部の差は3.2cmを測る。脚部には透かしを設ける。陸部は他所に比べて平滑であり、使用されていたことが窺える。胎土は0.1～3.0mmの黒色粒を多く含むが密である。焼成・還元とも良好で、灰色～淡灰色を呈す。横田賢次郎氏の分類によるI-C類（横田、1983）。

甕（21）　底部の破片である。残存高4.6cmを測る。内外面とも粗いナデで仕上げる。焼成・還元とも良好で、淡灰青色～暗青灰色を呈す。

土師器

小皿a（22）　底部の破片である。残存高0.9cm。内外面とも摩耗により調整不明。淡橙乳白色を呈す。

椀c（23）　底部の破片である。残存高1.8cm、高台径6.8cmを測る。内外面とも摩耗により調整不明。淡乳白色を呈す。

大椀c×盤（24）　底部の破片である。残存高1.7cmを測る。内外面とも摩耗により調整不明。淡褐白色を呈す。

甕（25）　口縁部の破片である。残存高4.2cmを測る。内外面とも摩耗により調整不明。口縁は二次的に火を受け褐色化している。

黒色土器A類

椀c（26・27）　いずれも底部の破片である。摩耗により調整不明であるが、体部内面が黒色化しているため、黒色土器と判断した。26は残存高1.8cmを、27は残存高1.5cmを測る。

瓦類

平瓦（28）　小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ1.8cmで、瓦質に仕上がる。凸面はかなり摩耗しており格子叩きと確認できるが詳細は不明である。凹面は布目痕がみられる。端部はいずれもヘラ切りしている。胎土は他と比べて特徴的であり、2～3mm大の砂粒が含まれ、粗い印象を受ける。表面は淡灰色、断面は淡茶褐色～暗灰色を呈す。

その他の遺物

鉱滓（29）　11.1×10.4cm、厚さ3.6cmを測る。褐色を呈し、鉄分が多いことが窺える。椀形滓の可能性がある。

3）土層出土遺物

茶色土層（図28）

須恵器

坏c（30）　底部の破片である。残存高1.4cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。

甕（31）　口縁部の破片である。残存高3.2cmを測る。

土師器

椀c（32）　底部の破片で、高台は欠損している。残存高1.6cmを測る。摩耗により調整不明である。

黒色土器A類

椀c（33）　底部の破片で、高台は欠損している。残存高1.8cmを測る。摩耗により調整不明であるが、体部内面が黒色化しているため、黒色土器と判断した。

越州窯系青磁

椀（34）　底部の破片である。焼成は良好。素地はやや密で淡灰色～淡赤茶褐色を呈す。体部外面は化粧土をかけており、内面の釉は淡黄土色に発色する。Ⅱ-2類。

瓦類

軒丸瓦（35）　外区圏線および珠文が残存する。瓦質に仕上がり、淡灰色～黒灰色を呈す。

丸瓦（36）　小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ1.5cmで、瓦質に仕上がる。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕がみられる。端部はいずれもヘラ切りしている。

平瓦（37～39）　37は側面端部の一部が残存する。厚さ2.7～3.1cmで、焼成はあまく瓦質に仕上がる。凸面は縄目叩きで、凹面は布目痕および模骨痕がみられる。ただ摩耗が進んでいるが側面端部はヘラ切りとみられ、その切口角度をみると一枚作りの可能性が窺える。38は小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ2.1cmで、瓦質に仕上がる。凸面は横長斜格子叩き（I-Cb×c類）を施し、凹面は布目痕がみられる。端部はいずれ

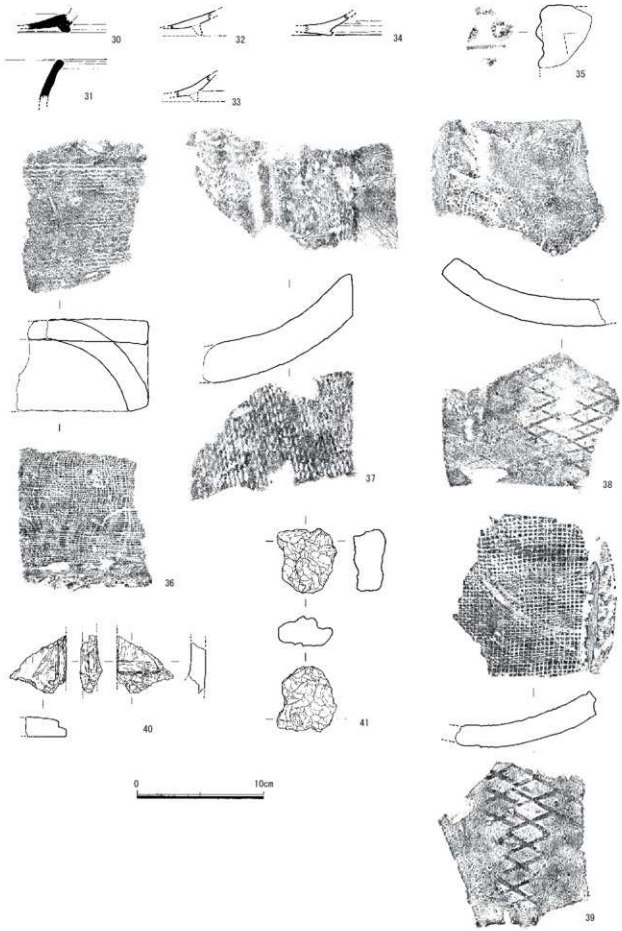


図28. 茶色土層出土遺物実測図 (1/3)

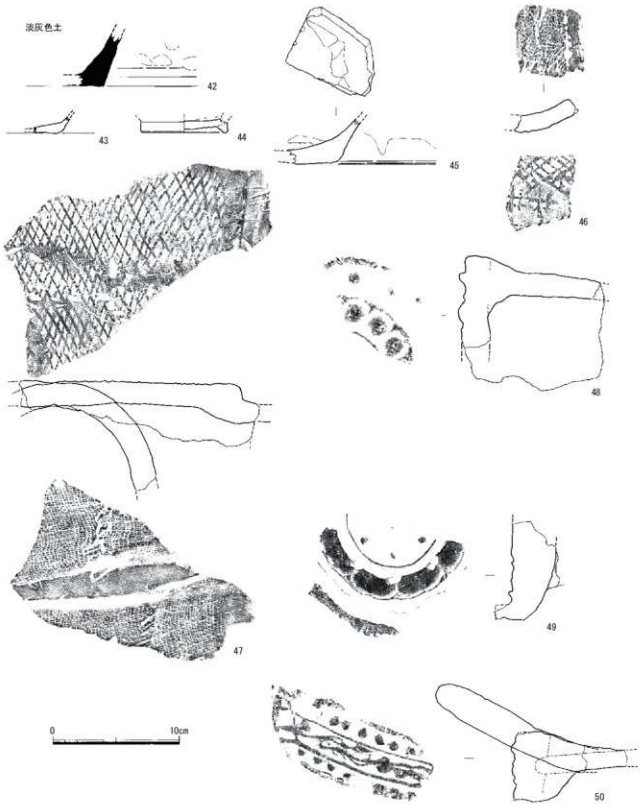


図 29. 淡灰色土層出土遺物実測図 (1/3)

もヘラ切りしている。39 も小口端部また側面端部の一部が残存する。厚さ 2.1cm で、瓦質～須恵質に仕上がる。凸面は横長斜格子叩き（I-Ce 類）を施し、凹面は布目痕がみられる。小口端部はヘラ切りし、側面端部は内面にヘラを入れた後割り離している。

石製品

加工品(40)　滑石製加工品である。図上で縦3.85cm、横3.35cm、厚さ1.2cmを測る。表裏とも一部に直線的な段を有している。

その他の遺物

鉱滓(41)　4.9×4.3cm、厚さ2.5cmを測る。褐色を呈し、鉄分が多いことが窺える。椀形滓の可能性も考え掲載した。

淡灰色土層(図29)

須恵器

壺(42)　底部の破片である。残存高4.2cmを測る。内面は回転ナデ、外面は回転ヘラ削りを施す。

土師器

坏a(43)　底部の破片である。残存高1.3cmを測る。内外面とも風化している。

黒色土器B類

椀c(44)　底部の破片である。残存高1.1cmを測る。風化が進んでいるが、内面にはミガキが見える。

越州窯系青磁

椀(45)　底部の破片である。残存高3.6cmを測る。I-5類。

瓦類

平瓦(46)　側面端部の一部が残存する。厚さ1.3cmで須恵質に仕上がる。凸面は横長斜格子叩き(I-Cb類)を施す。凹面は布目痕がみられる。九歴文字瓦分類901Gb型式。

丸瓦(47)　玉縁部との境の一部と本体が大きく残存する。厚さ1.85cmで、瓦質に仕上がる。凸面は細かな横長斜格子叩き(I-Ca類)を施すが、大きさは不均一である。凹面は布目痕がみられる。

軒丸瓦(48・49)　48は外区珠文帯および複弁が残存する。九歴分類208Ca型式。49の瓦当は径15.7cm程度に復元される。厚さ3.5cm。九歴分類208Ca型式。

軒平瓦(50)　瓦当の半分が残存する。九歴分類691Ab型式。なお接合部では瓦当に瓦本体を差し込み、上下を粘土で詰めている様子が確認される。

5. 小結

筑前国分寺跡の寺域南辺には東西に走向する築地塀があったことが、寺域南西隅部分を調査した第13・21次調査成果より推測されている。本調査にあたっても国分寺寺域南辺の更なる解明が期待されたが、築地塀等の外郭施設の発見には至らず、過去の成果を大きく超える成果はなかった。ただここで検出したSD001をはじめとする東西に走向する遺構群の性格については、ある程度の方向性を提示したい。

筑前国分寺関連遺構配置の検討については、先の報告にて中島恒次郎氏が行っている(太宰府市教委、1999)。この検討では、旧日本測地系(第Ⅱ系)を基に、①発掘調査検出の各遺構の座標上の振れの平均値から算出した国分寺推定中軸線1(GN2°　35'15"E)、②発掘調査検出の講堂と金堂のそれぞれ中点を結んだ国分寺推定中軸線2(GN2°　11'28"E)を想定し、各遺構の位置関係を算出している。これによると、国分寺南外郭施設については、これら推定中軸線と直交しかつ金堂中点を通る推定中軸直交線(東西軸)から南へ約260小尺に位置していると推定される。中島の検討を本調査区に援用すると、本報告のSD001は中軸直交線(東西軸)から295尺前後に位置する(図30・表7参照)。つまり本調査区は国分寺南外郭施設推定ラインより南に位置していることになり、調査結果はそれを裏付けることになったといえる。

本調査区が寺域外と判断されるとなると、SD001は寺域南辺を東西に走行する道路側溝の一部と見なすのが妥当であろう。

国分寺寺域南辺を東西に走向する道路については、これまで国分松本遺跡第2・6次調査(未報告)、筑前国分寺跡第17次調査(太宰府市教委、1997)、辻遺跡第1次調査(太宰府市教委、1997)で検出され、これらは一直線で結ばれると推定されている。この道は、国分寺南辺、国分尼寺南側を通り、水城東門を通る官道に

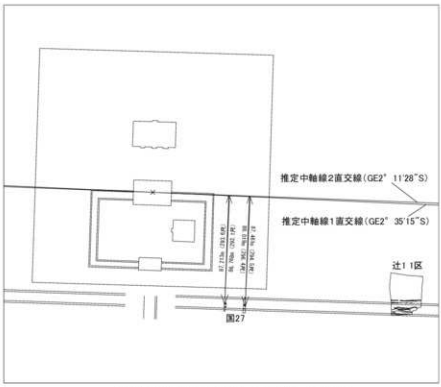


図30. 推定中軸直交線からの距離（1/3000）

繋がるものである。本調査区に最も近い辻遺跡第1次調査では、本調査区の東120 m地点で道路遺構を検出しており、その延長が当調査区で検出されたとの推定は肯首できるものである（図30参照）。

この東西道路についても中島は検討を加えている。中島は筑前国分寺跡第17次調査検出の道路側溝の任意点を抽出し、①金堂中点を通る推定中軸線1直交線（GE2° 35′15″S）との距離は310小尺、②金堂中点を通る推定中軸線2（GE2° 11′28″S）との距離は305小尺とする。つまり金堂中点を通る東西ラインから概ね300尺前後の位置に東西道路が位置することが想定され、本調査のSD001が295尺前後に位置することからも、当溝を道路関連遺構（道路側溝）とみなすことは妥当といえる。

では、SD001の南北どちらの側溝だったのであろうか。辻遺跡の道路検出位置をみると、SD001は道路南側溝の可能性が高いように思う。だが、辻遺跡で検出された道路部分は北側と比べて30～40cm程低くなっていることを鑑みると、本調査区でも南側が低く淡灰色土層が堆積している状況は同様と捉えることもできよう。元来の地形が南に向かって低くなっているためそのように見えるのかもしれないが、道路あるいは道路側溝が周辺の排水機能をも担っていたため道路部分が一段低くなっているとする見解は従来から指摘されているところであり、SD001南側が道路路面部だったとする想定は、まだ検討の余地があると思う。ここで断ずることはできないが、今後の課題として挙げておく。

なお、SD001灰褐色土とその下位の淡灰色土層との関係は、前者が後出することが切り合い関係で確認されているが、出土遺物をみると、前者が平安時代前期までの遺物しか含まれないのに対し、後者は平安時代後期の遺物を若干含んでいる。遺構検出の際、これらの埋土の差異は比較的明確であり、層序関係の検証を調査区東壁でも行っていることから、遺構構築順は間違いないとみられるが、淡灰色土層が複数分層されることから、この層の上部に新しい時期の層が含まれていた可能性が想定される。その認知と遺物分別にミスがあったのだろう。

大宰府条坊内の調査では、道路側溝が平安時代後期に埋没する事例をよく見かけるが、道路機能はその後も引き継がれている箇所もある。本調査で検出したSD001の西延長上は現在も道路として機能している。

この東西道路の当初の側溝も（SD001灰褐色土部分）が平安時代前期に埋没した後も、路面上は道路としての利用がなされ続けた可能性は十分にある。淡灰色土層が路面部分だったとすると、SD001灰褐色土が埋没した後にSD001暗茶色土部分が側溝として機能し、これが埋没する平安時代後期まで淡灰色土層が路面機能を継続していたことは、十分想定されるところである。淡灰色土層の分層が十分でなかった可能性を指摘し、今後の調査につなぎたい。

（井上信正）

【引用および参考文献】

太宰府市教育委員会（1997）『筑前国分寺跡1』太宰府市の文化財第32集

太宰府市教育委員会（1997）『辻遺跡』太宰府市の文化財第 33 集

太宰府市教育委員会（1999）『筑前国分寺跡Ⅱ』太宰府市の文化財第 40 集

横田賢次郎（1983）「福岡県内の硯について－分類と編年に関する一試案」『九州歴史資料館論集 9』

表 6. 遺構一覧

S-番号	遺構番号	遺構性格		堆積土	先後関係	埋没時期	地区番号
1	27SD001	溝	国分寺南の東西道路北側溝とみられる	aトレンチ：淡灰色土層→1灰褐色土→1暗茶色土 bトレンチ：茶褐色土		暗茶色土：12ｃ中～ 灰褐色土：～平安前期 茶褐色土：平安（前期?）	aトレンチ
2	27SX002	溝×土坑		灰褐色土→茶色土		～平安前・中期	aトレンチ
3	27SX003	たまり状遺構		灰茶色土		古代	aトレンチ
茶色土	茶色土層	人工層位	遺構検出時の人工層位				aトレンチ
淡茶土	淡茶色土層	人工層位	bトレンチにおける遺構検出時の人工層位				bトレンチ
淡灰土	淡灰色土層		S-1が掘り込まれた下位の層位。流水が長期あったのか、最下位には固くしまった砂層あり。流水堆積か?　砂層からは遺物なし。			平安後期	aトレンチ
表土	表土						調査区全体

表 7. 溝の座標・方位一覧

遺構名	計測位置	標値（国土座標法第Ⅱ系（旧座標）		距離		遺構の方向
		X座標	Y座標	X方向	Y方向	
国27SD001	aトレンチ東端任意点	57376.97	−45523.23	1.43	−16.28	G.E.5° 1′ 11″ S
	bトレンチ東端任意点	57378.40	−45539.51			
	aトレンチ東端任意点と	57376.97	−45523.23	87.461（294.5尺）		
	推定中軸線1直交線	57464.431	−45519.278			
	aトレンチ東端任意点	57376.97	−45523.23	88.019（296.4尺）		
	推定中軸線2直交線	57464.989	−45519.862			
	bトレンチ東端任意点	57378.40	−45539.51	86.768（292.1尺）		
	推定中軸線1直交線	57465.168	−45535.589			
	bトレンチ東端任意点	57378.40	−45539.51	87.213(293.6尺)		
	推定中軸線2直交線	57465.613	−45536.173			

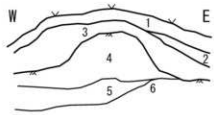
※推定中軸線については、『筑前国分寺跡Ⅱ』での検討によるもので、座標系は日本座標系（旧座標）である。
基点は金堂中点（X=57467.920、Y=−45596.480）を使用。
推定中軸線1は、検出遺構の振れの平均値から算出したものでG.N.2° 35′ 15″ Eを基にしている。
推定中軸線2は、金堂と講堂の中点を結んだ線でG.N.2° 11′ 28″ Eを基にしている。
※尺度は、1尺=0.297mで計算

4. 裏山遺跡　第１次調査

1. 調査に至る経緯

本調査地は太宰府市国分５丁目 936-3 に所在し、小字名が「裏山」に相当する。専用住宅建築に伴って確認調査を行った結果、時期不明ながらピットが検出された。このことから裏山遺跡第１次調査として記録保存を目的とした本調査を実施した。調査期間は平成 20 年６月 23 日～同年７月 11 日であるが、廃土処理手順と隣接住宅に対する安全上の理由から調査地を南北に分割して南から順に実施し、住宅が隣接する西側約 1m 幅に関しては、南北調査区の調査が終了した後に重機による表土除去時に立会調査を実施した。開発対象面積 240 ㎡、調査面積 160 ㎡を測る。確認調査は高橋学、本調査は下高大輔が担当した。

2. 基本土層（図 31・32）



1 腐葉土［表土］
2 真砂［奥ノ池堤基礎か］
3 淡黄色土［自然堆積（崩落）土］
4 明茶色粘質土（粘質やや強い）［地山］
5 茶色粘質土（粘質やや弱い）［地山］
6 淡白黄色土・暗黄色土
（花崗岩風化土）［地山］

図 31. 土層模式図

本調査地における基本層序は、上層から約 0.2m 程度の腐葉土、0.1 ～ 0.6m 程度の淡黄色土の自然堆積（崩落）土が堆積し、明茶色粘質土の地山に到達する。また、当地の地山は明茶色粘質土の下層に茶色粘質土・淡白黄色土・暗黄色土が確認できる。淡白黄色土・暗黄色土は花崗岩風化土であり、当地における本来の地山と考えられる。この上層に茶色粘質土・明茶色粘質土が徐々に堆積した結果、本調査地における地山が形成されたものと考えられる。そして、地山最上層である明茶色粘質土によって尾根地形が形成されている。また、調査地の東隣には明治 44 年築造とされる「奥ノ池」があり（太宰府市、2001a）、調査南区東側部分において築堤基礎工事段階に堆積したと想定される小石混ざりの真砂が若干確認できた（図 33）。

なお、本調査における遺構検出は、自然堆積（崩落）土である淡黄色土を重機によって除去した後に、地山である明茶色粘質土直上において実施した。遺構検出までに出土した遺物に関してはすべて「表土」として取上げている。

3. 遺構（図 33）

調査の結果、調査南区において２基のピットが検出された。なお、調査北区及び南北調査区西側における立会調査地においては遺構が検出されなかったが、立会調査時の重機による大型の切り株除去に伴って須恵器甕の完形品が出土している（図 34-5）。

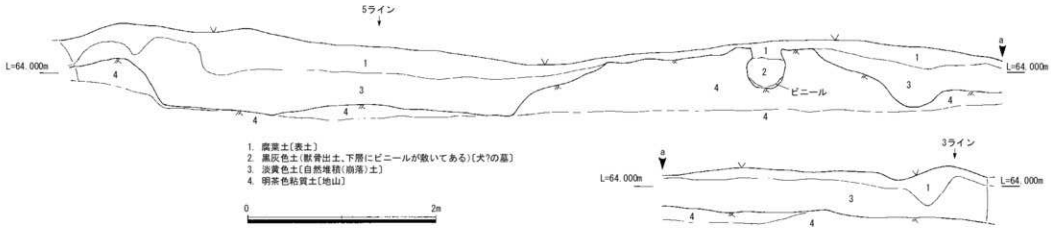
写真 1. SX001 遺物出土状況（南から）

SX001（写 1）

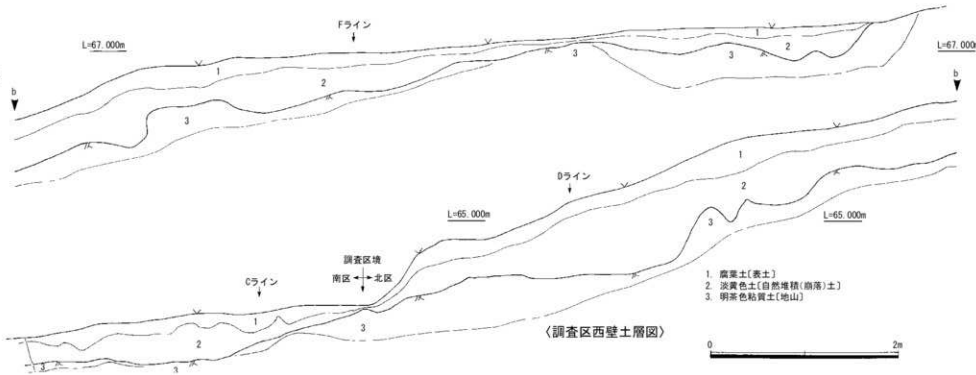
調査南区の北側ほぼ中央の遺構検出時に約 0.4m 弱の楕円形状に須恵器甕の破片が出土した。本遺構は、本来ピットが掘り込まれて須恵器の甕が埋納されていたものと想定される。重機による表土除去時に地山を掘り過ぎたためにピットの底部のみが遺構検出時に確認できたものと考えられる。

SX002（写 2）

確認トレンチの西端において検出した約 0.3m の円形を呈するピットである。埋土は赤化した焼土に若干の炭化物を含む。ただし、本遺構は試



〈調査区東西(南区北壁)土層図〉



〈調査区西壁土層図〉

図 32. 土層実測図 (1/40)

正誤表 第1次調査 報告書掲載

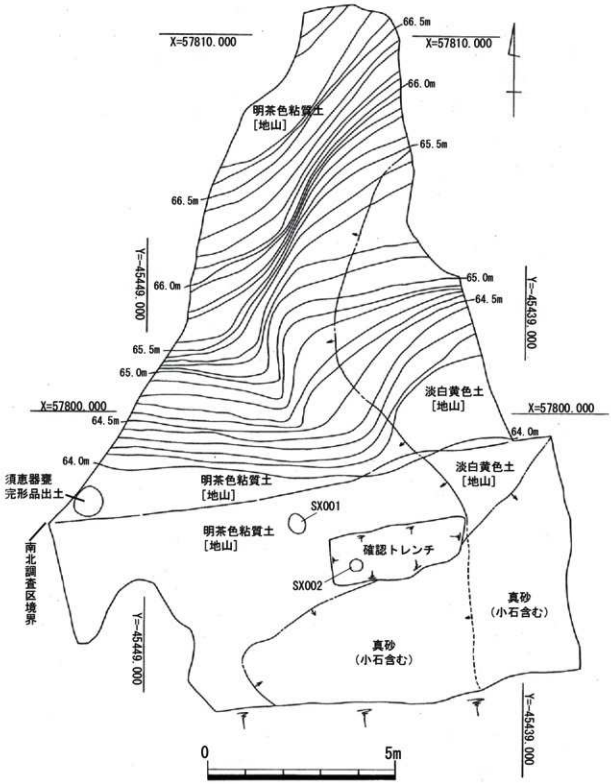


図 33. 遺構配置図（1/100）

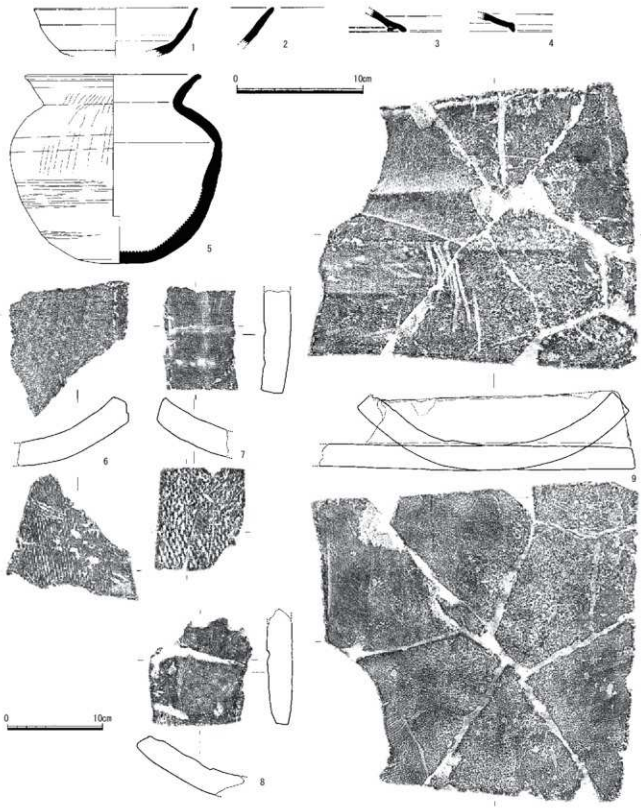


図 34. 出土遺物実測図（1 ～ 5 は S=1/3、6 ～ 9 は S=1/4）

写真 2. SX002 ピット底部確認状況（西から）

掘調査時に重機によって掘り過ぎたためにピット底部を確認したのみである。

4. 遺物

SX001

須恵器

甕（写真 CD － 145・146）体部のみの破片であり、実測は不可能な資料である。色調は外面が淡赤茶褐色、内面が暗褐色を呈する。胎土は密であるが、若干軟質を呈する。

表土（図 34）

須恵器

坏×高坏（1・2）1 は口縁部から体部にかけての破片である。復原口径 13.0 ㎝・残存器高 3.8 ㎝である。底部にヘラ状工具による切離し痕が確認できる。色調は内外面ともに暗灰色を呈し、焼成・還元ともに良好。胎土は緻密で、硬質。2 は、口縁部から体部上部にかけての小破片である。残存器高 3.0 ㎝で、色調は内外面ともに茶褐色を呈し、焼成良好・還元はやや不良である。胎土は緻密だが軟質である。

蓋 1（3）口縁部のみの小破片である。残存器高 1.8 ㎝で、色調は内外面ともに淡灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で、やや硬質である。

蓋 3（4）口縁部のみの小破片である。残存器高 1.5 ㎝で、色調は内外面ともに淡灰白色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で、硬質である。

甕（5）口縁部にやや欠損があるが完形品である。復原口径 13.8 ㎝・器高 14.9 ㎝・底径 6.6 ㎝で、色調は内外面ともに灰色を呈し、焼成・還元ともに良好である。胎土は緻密で硬質である。体部内面に褐色の付着物がある。

瓦類

平瓦（6 ～ 9）6・7 は凸面に縄目叩き痕、凹面に布目痕・模骨痕が確認できる破片資料である。色調は淡黄色を呈しており、焼成良好・還元がやや不良気味である。胎土はやや粗く軟質気味である。8 は凸面が摩耗により叩き痕や調整痕不明、凹面も摩耗が著しいが一部に布目痕が確認できる破片資料である。色調は淡黄茶色を呈しており、焼成良好・還元がやや不良気味である。胎土はやや粗く軟質である。9 は狭端部側が欠損している完形品に近い資料である。縦 35.5 ㎝以上・横 30.0 ㎝・厚さ 2.7 ㎝である。色調は淡黄茶色を呈しており、焼成良好・還元がやや不良気味である。胎土はやや粗く軟質である。凸面は横方向に浅い段があり、削り調整痕の可能性がある。凹面は模骨痕・布目痕・糸切り痕・分割突帯が確認できる。なお、8・9 は各々の割れ目部分が一致しないので別個に掲載しているが、色調や凹凸面の成形・調整痕、規模から同一個体の可能性もある。

5. 小結

調査の結果、地山の一種である明茶色粘質土によって形成された尾根上に相当する箇所からピットが 2 基検出され、さらに遺構に伴ってはいないが須恵器の完形品が出土した。2 基のピットのうち 1 基は、須恵器の埋甕が想定できる。今回の調査によって出土した資料の多くは表土層からの出土であるが、中でも須恵器は 6 ～ 7 世紀頃のものと考えられ、当概期における尾根上の土地利用の一端を窺う資料を得たものと考える。尾根上に散在的にピットを掘り込み須恵器甕を埋納する行為が想定できる。また、近隣において古墳が存在していた可能性もある。

また、本調査において表土中ではあるが、7 ～ 10 世紀頃のものと考えられる平瓦が数点出土している。しかも、一点は一部欠損があるものの完形品であった。本調査地は筑前国分寺の北側に相当する場所であり、調査前においては瓦窯等の国分寺に関係する遺構の検出が予想された。今回出土した瓦も国分寺に関係する可能性

もあるが、それについては近隣における今後の埋蔵文化財調査に委ねる。

最後に、今回調査・報告した裏山遺跡（小字「裏山」に相当する地区）は、埋蔵文化財調査としては初めて行ったものである。当遺跡の現況は、緩やかな地形部分については国分台団地（昭和43年開発）として宅地化されている（(財）太宰府市文化スポーツ振興財団、2002)。団地開発以前は、昭和23年の地形測量図（太宰府市教育委員会、1989）や、団地の方々のお話によると、緩やかな傾斜面の一部は蜜柑などの耕作地であったようである。また、さらに遡ると大日本帝国陸地測量部による明治33年測量の地形測量図には国分村から四王寺山山頂（水城口門礎が存在する場所）に至る山道が記載されているのみである。文化３年（1806）作成とされる『太宰府旧蹟全図　北図』（太宰府市、2001b）においても同様の記載内容である。よって、当地においては不明な部分が多々あり、今回の調査はその一端を窺うことができたものと考える。　（下高大輔）

【引用文献】

（財）太宰府市文化スポーツ振興財団（2002）「4 開発と人間の生活　宅地開発と人工増加」『太宰府－人と自然の風景－』

太宰府市（2001a）「太宰府市の土地利用　各集落の水利の変化　国分」『太宰府市史　環境資料編』

太宰府市（2001b）「太宰府旧蹟全図」『太宰府市史　環境資料編』

太宰府市教育委員会（1989）『太宰府条坊跡Ⅴ－昭和23年の太宰府－』太宰府市の文化財第13集

表 8. 遺構一覧

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	時　期	地区番号
1	SX001	ピット	須恵器甕破片出土			古墳後期？	南
2	SX002	ピット	ピット底を確認	焼土、炭化物混入			南

表 9. 出土遺物一覧

S-1　　古墳後期？

須　恵　器	甕	

表土（南区）　　近・現代

須　恵　器	蓋3、坏、坏×坏蓋、甕、壺？、破片	
土　師　器	甕、破片（古代？）	
瓦　　類	平（奈良～平安中期頃）	
国　産　陶　器	土管？	

表土（北区）　　近・現代

須　恵　器	坏蓋1、坏×椀、甕、甕×壺	
土　師　器	破片	
瓦　　類	平（奈良～平安中期頃）	
国　産　陶　器	植木鉢	
国　産　磁　器	染付碗	

5. 北外郭施設推定地の確認調査

1. 調査に至る経過および調査結果

平成16年5月に、筑前国分寺跡北外郭施設推定地にあたる国分4丁目21-1において、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財取り扱いの有無に関する問い合わせがなされた。当該地は、東西に走る小路が存在し、筑前国分寺の北を画する施設の残存として考えられることから、四至を決定する上で重要な地として理解されていた。そのため、計画に先立ち埋蔵文化財の有無を確認する必要があり、地権者承諾のもと、平成16年6月28日に確認調査を実施した。その結果、現地表下110cmの層厚で黄色砂礫層が確認でき、その下位には花崗岩基盤層が観察できた（写真4・5）。都合2箇所を南北に確認トレンチを掘ることになったが、遺構・遺物の確認はなく、この確認調査で埋蔵文化財の存在を明らかにすることができなかった。加えて開発対象地の南に所在する東西の小路もセットバック工事が施工されるということであったため、道路工事の際の立会いを求め、平成16年10月12日に立会調査を実施したが、基盤層である花崗岩を確認したにとどまった（写真6）。したがって、当初予想していた国分寺北外郭施設の存在を明らかにすることができなかったばかりが、河岸段丘礫層の確認にとどまり、今後の周辺域、特に当該地番の西に所在する宅地部分での調査に期待することとなった。

（中島恒次郎）

写真3. 確認トレンチ設定状況（北東から）

写真4. トレンチ1状況（南から）

写真5. トレンチ2状況（南から）

写真6. 立会調査状況（東から）

Ⅳ．成果と課題

1．課題の抽出

筑前国分寺跡を取り巻く考古事象上の課題を整理すると、下記のものを指摘してきた（中島、1999）。

○二者の中心軸の振れ

中枢伽藍と外郭施設両者から導き出される中心軸の振れの差は、N0° 23′ 47″ Eを測り、分単位の差であることを考慮すると、単に測量誤差の範疇で捉えることも可能である。しかし、この差を導き出した経過から考えると、中枢伽藍から導き出される中心軸の振れ、N2° 11′ 28″ Eを算出起点として各外郭施設の設計尺と、外郭施設から導き出された中心軸の振れ、N2° 35′ 15″ Eを算出起点として各外郭施設の設計尺を求めた際の、数値拡散状況は当然のことながら後者の方が小さい。このことをもって、両者に施工時期差を想定したわけであるが、その差を考慮した時、問題にすべきものであるのか、現代の調査主体の差に帰結すべきものであるのか検討の余地を残すことになった。一方で、算出基点となるべき金堂中点は、筑前国分寺跡第25次調査が金堂跡において実施され、金堂規模の確定が期待されたものの、現存していた筑前国分寺本堂基礎によって定かにし難い状況であったことから、今だ明らかにしきれていない（九州歴史資料館、2000）。このことから、今だ筑前国分寺の中心軸の振れを含め、設計尺の算出を困難なものとしている。

○寺域北外郭施設の位置

本書において、推定地の確認調査を実施し、その結果を記述してきた。寺域四至の内、北外郭のみが明らかにしきれておらず、今後の課題として残さざるを得ない。

○寺域周辺に残存する南北地割

寺域周辺に観察できる東西南北の地割について、埋蔵文化財調査成果からは、様々な時期の埋没を見ることができ、現代から遡る可能性を多く秘めている。

○大宰府条坊との関係

大宰府条坊と筑前国分寺寺域との関係については、相互の中心軸の振れの差の違い、条坊施工基準辺長の差から、関係性が低いとする理解が一般的であった。そのような学説史上の理解の中で、阿部義平氏は東北での城柵の状況を考慮して、大宰府でも筑前国分寺・尼寺を取り込んだ形での条坊復原案を提起された（阿部、1986・1996）。この阿部氏の一連の論考について、その後検証もなく、「百花繚乱」的条坊復原案の一つとして理解されてきたむきがある。筆者自身も「百花繚乱」的条坊復原案に参画し、二時期の大宰府条坊復原案を提起してきた（中島、2008）。筆者が提起した復原案と阿部氏が提起された復原案の大きな違いは、基準辺長、すなわち一街区とでも言える区画の一辺の長さにある。筆者は、Ⅱ期施工条坊では98.84m（280大尺）を見込み、かつ政庁中心軸と条坊中心軸のズレについて、後者が西に7.77023m（22大尺）ズレていることを導きだした。一方阿部氏は、一時期の施工条坊復原案を提起され、基準辺長に関する記載を読み取ることができなかったが1町（108～109m）として示され、筑前国分寺・尼寺を取り込むことを提起するために24条24坊説を出された。両者に共通する作業限界として、政庁正殿中点がⅡ期ではなくⅢ期正殿であること、中心軸算出がⅢ期正殿とⅢ期南門という時期差を無視した基点を用いざるを得ないことがある。正殿の調査成果をみる限り、Ⅱ期正殿はⅢ期正殿に対し、約0.3m北に存在していることが礎石位置からみることができ、Ⅱ期とⅢ期を混在した形でしか中心軸ならびに中点を求めることができない点は、条坊論のみならず大宰府を理解する上で大きな障壁と言わざるを得ない（九州歴史資料館、2002）。近年馬田弘稔氏によって「地鎮遺構」が建物建造のための設計基準点であるという見解が提起されたが、このことを考慮すると南門「鎮壇具」・中門「地鎮具」のように正殿建築のための「地鎮遺構」の検出が望まれるところである（馬田、2008）。

残されていた課題全てを解決することはできないが、その後の調査成果、ならびに本書で報告してきた調査成果を踏まえて、上記課題のいくつかについて考察を加える。

2. 筑前国分寺の空間的位置

a. 造営の場と大宰府条坊

筑前国分寺造営の場と南に存在している大宰府条坊との関係は、先述したように阿部義平氏によって条坊内に規定する説と、条坊外に規定するその他諸氏の説の二者に分かれている（阿部、1986・1996）。両者が寄って立つ設定根拠を単純化することは困難だが、強いて単純化するならば、東北城柵の規模から算出した前者と、平安期に記された観世音寺文書を根拠として鏡山猛氏によって示された左右郭十二坊南北二十四条という規模に縛られる後者の違いに帰結できると考えられる。筆者自身も条坊復原案を提起したが、条坊範囲については復原案提起に際して、想定条坊範囲外における南北溝の存在や、正方位をとる建物の存在などを考慮し、鏡山猛氏が提起された左右郭十二坊南北二十四条の範囲外を設定することを思考したが、都における大垣相当遺構が未確認である現状にあって、新たな条坊範囲を提起できず、暫定的ながら鏡山氏の提起範囲による復原を行わざるを得なかった。加えて国分寺造営の場をどう取り扱うのかについても保留してきている（中島、2008）。

そこで、筆者が提起した条坊復原案の内、筑前国分寺造営時期に合致する政庁Ⅱ期施工条坊との関係をここでは検討してみたい。

まず作業前提として、筆者が提示してきた条坊復原案について整理すると、下記のようになる。

○算出基点

Ⅲ期正殿中点－Ⅲ期南門中点を結んだ軸線を政庁中軸線とした。馬田弘稔氏が導き出された「地鎮具」建築基準点説を考慮するならば、中門地鎮具（Ⅱ期）を視野に入れることも今後は必要であると考えている（馬田、2008）。

○条坊施工時期

二時期の施工を、遺構埋没時期の差から導き出した。奈良期から平安中期までに埋没する一群と平安後期に埋没する一群である。前者が政庁Ⅱ期施工条坊、後者が政庁Ⅲ期施工条坊と考えている。

○一街区の基準辺長

政庁Ⅱ期施工条坊の基準辺長は、98.84m（280大尺）を算出している。

○政庁中軸－条坊中軸との誤差

本書にて問題とする条坊施工時期は、Ⅱ期施工条坊ということになる。Ⅱ期施工条坊と政庁中心軸との誤差は、先述したように7.77023m（22大尺）を測る。しかし、作業前提となる政庁中心軸の算出基点が、いずれもⅢ期施工のものを使用しているため、今後Ⅱ期施工のものが発見され次第再検討すべきであると考えている。

○正殿中点と直近の条路との誤差

正殿中点が、条路中心を通っていないことを算出から導き出しており、南北幅に対して正殿中点を基点とした時、北へ7.753m（20大尺）、南へ91.087m（260大尺）の位置に条路が想定できる。南側の条路については、大宰府条坊跡第264次調査にて確認した264SF090が該当する（太宰府市教委、2008）。この政庁中軸－条坊中軸の誤差ならびに正殿中点と直近の条路との誤差を考慮した時、政庁中軸ならびに正殿中点を算出基点とした、各施設までの距離を基準辺長（98.84m）で除算する方法は、政庁北西に所在する国分寺の場合、以下の計算式になる。

●坊路計算

坊路数＝｛（政庁中軸からの距離）－7.77023(m)｝/98.84(m)

●条路相当数計算

条路相当数＝｛（正殿中点からの距離）－7.753(m)｝/98.84(m)

以上を作業前提とし、筑前国分寺の大宰府における空間的位置を確認する。

まず政庁中心点から国分寺関連施設の距離を計測すると、表10-1のようになる。この際の中心軸の振れは、政庁中心軸の振れ（N0° 34′ 12.32″ E）を用いている（中島、2008）。これらから見ると、条坊中心軸から西へ凡そ七坊の位置に国分寺東外郭施設が位置し、同様に約九坊の位置に国分寺西外郭施設が設定されてい

ることが読み取れる。また金堂中心点は確認されていないが、図上からの推定点[1]ならびに講堂中心点の位置は、両者の中心である約八坊路延長線上にのることが併せて読み取ることができる。しかし三者とも誤差が幾分存在しており、完数値を得たと言えるほど明瞭ではない。そこで、国分寺中心軸の偏向値、いわば中心軸の座標北からの振れ値（N2° 11′ 28″ E）を基準として再計算したものを表10-1に併記した（太宰府市教委、1999）。再計算の結果、金堂・講堂の中心軸が「8」に、西外郭施設の南北軸が「9」、東外郭施設の南北軸が「7」という完数値を得ることができ、誤差平均で0.0396、実数距離で3.9mを測る。加えて塔中心点の東西位置は「7.75」、誤差0.009、実数距離0.89mを測る。このことは、国分寺中心軸の振れに影響され、条坊規格には厳密には合致しないものの、ほぼ坊路延長線上に国分寺四至のうち東西区画については合致しているとみてよいと考えられる。その際の中心軸の誤差をどのように見ることができるであろうか。参考になる資料として大宰府条坊跡第264次調査で確認された、奈良末期施工と考えられる条路痕跡を上ることができる。当該調査地では、奈良前期から後期にかけて掘立柱建物群が建築され、建物規模からみて官衙域に包括されるものと考えられるものである。これら建物群が廃絶した後に、官衙域内に条路が再施工されたと考えられる（太宰府市教委、2008）。この条路偏向が、N94° 25′ 4″ Eを測り、座標北に対した直交軸の方向は、N4° 25′ 4″ Eを測る。換言すると、相互[2]の施工時期差を表現しているものと考えられ、大略の位置が坊路延長に位置していることを考慮すると、先に検討した政庁中心軸－国分寺中心軸のズレは、施工時期差として大過ないものと考えられる。このように考えると大宰府条坊施工後に筑前国分寺が施工されていると考えられ、等しくⅡ期施工条坊が筑前国分寺造営以前まで遡ることを表している。

では南北位置はどうであろうか。南北位置については、表10-1から読み取れるように、Ⅱ期施工条坊の条路規模を反映していると考えられるものは、推定値ながら金堂ならびに講堂が該当していると考えられ、正殿中点の北に所在する条路から数えて6「条」目に金堂が、同じく6.5「条」目に講堂が位置している。塔は、表10-1を見る限り5.717を測り、完数値化した時5.75「条」目にあたることになり、南北位置3/4「条」ならびに東西位置3/4「坊目」に塔が配置されていることになる。このことから、寺の中心的建物である金堂・講堂・塔はⅡ期施工条坊を基礎に配置していると考えられる。一方他施設については、完数値を得ることができずⅡ期施工条坊規格を反映していないことが分かる。Ⅱ期施工条坊の基準尺は、大尺計算による条路規模であり、筑前国分寺施工時期が使用基準尺変更になった以降であることを考慮すると、他施設は小尺を基準尺として用いられた可能性が高い。そこで小尺にて再計算したものが表10-2になる。これら小尺による計算値は、既に前報告にて記してきた点を変え得るものではないため、表10-2を参照いただきたい。本書に関係する部分について詳述すると、第27次調査で確認した国分寺前面道路の空間的位置については、既報告・未報告を含めて考えると、国分松本遺跡第6次調査（未報告）ならびに辻遺跡第1次調査（太宰府市教委、1997）で確認した東西道路の任意中点の講堂中点からの距離は前者が130.6495m（440小尺）、後者が129.7105m（435小尺）を測り、金堂－講堂間の距離が45.182m（約150小尺[3]）であることを考えるならば、金堂中点から前面道路までの距離は290小尺前後、恐らくは300小尺を測ることになると考えられる。

次に国分寺と同時に施工されたと考えられる国分尼寺はどうであろうか。先のⅡ期施工条坊規格を図35に示したが、国分尼寺中心軸は南門とされる尼4SB001中点を算出基点とした時、数値上からは12.057「坊」という数値が導き出され、国分寺の配置と異なり、完数値に近い値が導き出された。一方国分寺同様に、国分寺中心軸の振れで再計算した場合、12.218「坊」という数値が得られ、完数値を得るには難しい。また小尺による計算では、狭川真一氏によって算出された1400小尺という完数値が導き出され、尼寺の配置については、Ⅱ期施工条坊を意識しつつも国分寺金堂を設計基点として小尺による設計が行われたと解した方が蓋然性は高いと考える。しかし、尼寺南門と推定される尼4SB001の中点までは、国分寺金堂（講堂）から1400小尺を測るが、南門の南側で検出された尼4SD020はⅡ期施工条坊規格での十二坊路延長線上に載り、尼4SD030は国分寺中心軸偏向線上にのる（太宰府市教委、1995）。以上を総括したものが図35になる。

次に大宰府条坊施工範囲が問題となる。阿部義平氏が提起された国分寺・国分尼寺までを取り込んだ条坊復原案の真偽についてであるが、結論を先んじれば「保留」せざるを得ない。理由としては、Ⅱ期施工条坊推定

位置に合致する遺構が希薄な点をあげ得る。まったく存在しないわけではなく、「条路」規格に一致したもののみが観察できる。具体的には、国 5SD046（時期不明。福岡県教委、1978）、国 17SD034（奈良埋没。太宰府市教委、1997）の二者である。一方坊路延長箇所に合致するものは国分寺周辺には観察できない。これに対し、坊路位置を意識して配されたと解した、国分寺偏向線に沿った遺構は存在している。具体的には国 14SD005（平安中期埋没。太宰府市教委、1997）、国 19SK010（平安前期埋没。太宰府市教委、1997）、国 23SD010（平安中期埋没。太宰府市教委、1999）、国 23SD015（平安前期埋没。太宰府市教委、1999）などが検出されている。これらのことを勘案すると、国分寺周辺にて観察できる東西南北の地割施工は、Ⅱ期施工条坊とは時期差を持つ、国分寺造営期に施工されたと解した方が蓋然性は高いと判断される。しかし、Ⅱ期施工条坊を「意識」するという観点を考慮するならば、阿部氏が提起した国分寺・国分尼寺を包括する条坊施工の可能性も否定するものではないことになる。これら諸事象を勘案すると、阿部氏案について現状では、今後の検討課題として「保留」せざるを得ないと考えている。

b．寺域

国分寺の寺域について、金堂を中心として東外郭施設（国 14SA070a）までの距離が 315 小尺（93.868m）、西外郭施設（国 21SD020・国 24SA010）までの距離が 310 小尺（92.518m・91.928m）を測り、南面築地任意中心までの距離が 260 小尺（77.12m）を測る。これらの数値を根拠にして、620 小尺を基準辺長とした正方形を推定国分寺寺域とし、国 21SD020 南端を寺域南西基点として図上に配置したものを図 35 に示した。結果として大略現国分寺丘陵上にのることになり、これまで想定していた国分寺北外郭施設推定地の南に位置している。したがって先の想定を訂正し、現状では 620 小尺四方の寺域を推定するとともに、今後の課題として北西隅部分の確認調査を提起しておきたい。

3．成果と課題

以上を整理すると以下のようになる。

○筑前国分寺と大宰府条坊の関係

・中枢伽藍である金堂・講堂・塔は、Ⅱ期施工条坊における坊路ならびに条路規格を北へ延長した位置で設計されている。ただし、坊路延長に大略のるものの、中心軸の振れが異なっており、条坊施工と同一時期ではなく、筑前国分寺が後出して造営されていることが考えられる。

○寺域

・寺外郭施設のうち東西施設は、中心軸をズラすものの、大略坊路位置を意識して施工され、金堂中点からの距離が約 310 小尺を測り、南側の築地任意中心までが 260 小尺を測ることから、これらを想定基礎として、620 小尺四方の正方形が寺域と推定した。結果として、南西隅の国 21SD020 南端を基点とし、中心軸の座標北に対する振れN2° 11′ 28″ Eで偏向した上で図上に配すると、ほぼ国分寺がのる丘陵上におさまることになる。このことから、これまで想定してきた北外郭施設の位置を南に変更する必要が生じてくる。しかしあくまでも国分寺域を正方形として想定しての結果であり、想定位置の確認調査が必須であることには変わりない。

○中心軸の振れの二者

・Ⅱ期施工条坊を造営規格の基礎としていることが明らかとなり、先の報告にて記述してきた中心軸の二者は、単に施設位置を意識した算出誤差の可能性が高くなった。

○寺域周辺に観察できる東西南北地割

・図 35 に示したように、Ⅱ期施工条坊にのる地割と国分寺偏向線上にのる地割の二者が存在し、またこれらとは異なる地割を有するものが観察できる。視野に入れるべきものとしてⅢ期施工条坊（基準辺長:89.1m）があり、今回検討を逸しているが、今後の検討課題としたい。

○国分尼寺との関係

・これまで提起されてきたように、尼寺は 1400 小尺西側に施工されていることを追認した。一方でⅡ期施工条坊との関係は、十二坊路延長上に大略南門が位置することになり、坊路北上によって国分寺ならびに国分尼寺

表 10. 各基点からの距離

Ⅱ期施工条坊　条坊中心軸-政庁中心軸とのズレ：7.77m　正殿中点から北に所在する直道の推定条路までの距離：7.753m

Ⅲ期施工条坊　条坊中心軸-政庁中心軸とのズレ：3.695m　正殿中点から北に所在する直道の推定条路までの距離：14.20m

国分寺中心軸-塔礎北とのズレ：N2° 11′ 28″ E（太宰府市教委，1999）

市条坊施工期を表現している（中島，2006）

表10-1

番号	遺跡名	調査次数	国分寺での位置	遺構名	性格	形成埋没	時期	造営時期※	算出基点	振れ	検出標標 X座標	検出標標 Y座標	検出点	実数距離 中軸からの距離	実数距離 正殿中点からの距離	基準尺での所数値【中軸】 99.54m【Ⅱ期施工】	基準尺での所数値【中軸】 推定実数	基準尺での所数値【中軸】 89.1m【Ⅲ期施工】	基準尺での所数値【正殿】 89.54m【Ⅱ期施工】	基準尺での所数値【正殿】 推定実数	基準尺での所数値【正殿】 89.1m【Ⅲ期施工】	備考	文献
1	国分寺跡	002 022	金堂	SB060	礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,469.0413	-45,596.6962	任意中点	783.371	604.581	7.947	–	8.751	6.038	6	6.625	舎利建物範囲が定まっていないこともあり，想定される高度から推定している。	3
2	国分寺跡	006 018	講堂	SB060	礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,514.2761	-45,594.2955	任意中点	781.405	649.838	7.927	–	8.729	6.406	6.50	7.133		2
3	国分寺跡	004	塔		礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,437.0859	-45,572.4283	任意中点	758.746	572.969	7.596	–	8.475	5.717	–	6.269		1
4	国分寺跡	021	西外郭南端		築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,393.0351	-45,691.9303	任意中点	877.944	527.631	8.803	–	9.811	5.260	–	5.762		5
5	国分寺跡	024	西外郭	2455S010	築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,462.4481	-45,688.6848	任意中点	875.299	597.073	8.777	–	9.782	5.962	–	6.541		本書
6	国分寺跡	014	東外郭	1454S70a	築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,496.4569	-45,501.4511	任意中点	688.403	632.943	6.885	–	7.685	6.325	–	6.944		4
7	国分尼寺跡	4	南門	45B001	掘立柱建物	建造	奈良	8期	正殿中点	政庁中軸	57,445.946	-46,013.1750	任意中点	1196.513	577.218	12.057	12	13.421	5.761	–	6.318		7
1	国分寺跡	002 022	金堂	SB060	礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,469.0413	-45,596.6962	任意中点	800.160	582.179	8.017	8	8.939	5.812	–	6.374	舎利建物範囲が定まっていないこともあり，想定される高度から推定している。	3
2	国分寺跡	006 018	講堂	SB060	礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,514.2761	-45,594.2955	任意中点	799.476	627.473	8.010	8	8.931	6.270	–	6.892		2
3	国分寺跡	004	塔		礎石建物	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,437.0859	-45,572.4283	任意中点	774.688	551.175	7.759	7.75	8.653	5.498	–	6.026		1
4	国分寺跡	021	西外郭南端		築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,393.0351	-45,691.9303	任意中点	892.419	502.588	8.950	9	9.974	5.006	–	5.481		5
5	国分寺跡	024	西外郭	2455S010	築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,462.4481	-45,688.6848	任意中点	891.929	572.074	8.944	9	9.968	5.709	–	6.261		本書
6	国分寺跡	014	東外郭	1454S70a	築立塀	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,496.4569	-45,501.4511	任意中点	706.033	613.216	7.065	7	7.983	6.136	–	6.722		4
7	国分尼寺跡	4	南門	45B001	掘立柱建物	建造	奈良	8期	正殿中点	国分寺中軸	57,445.946	-46,013.1750	任意中点	1213.362	543.055	12.218	12	13.599	5.416	–	5.935		7

表10-2　　既刊国分寺中心軸の振れは，中軸復軸線の振れ（N2° 11′ 28″ E）で算出している（太宰府市教委，1999）

番号	遺跡名	調査次数	国分寺での位置	遺構名	性格	形成埋没	時期	造営時期※	算出基点	振れ	検出標標 X座標	検出標標 Y座標	検出点	実数距離 中軸からの距離	実数距離 正殿中点からの距離	小尺距離(尺)【国分寺中心軸】 0.296m	小尺距離(尺)【国分寺中心軸】 0.297m	小尺距離(尺)【国分寺中心軸】 0.298m	想定実数	小尺距離(尺)【講堂中点】 0.296m	小尺距離(尺)【講堂中点】 0.297m	小尺距離(尺)【講堂中点】 0.298m	想定実数	文献
1	国分寺跡	002 022	金堂	SB060	礎石建物	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,469.0413	-45,596.6962	任意中点	6.259	45.182	0.975	0.972	0.969	–	152.641	152.127	151.616	–	3
2	国分寺跡	004	塔		礎石建物	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,437.0859	-45,572.4283	任意中点	25.213	76.186	85.179	84.892	84.607	85	257.385	256.518	255.657	255	1
4	国分寺跡	021	西外郭南端	2155S020	築立塀	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,393.0351	-45,691.9303	任意中点	92.518	124.773	312.559	311.507	310.461	310	421.532	420.112	418.702	–	5
5	国分寺跡	024	西外郭	2455S010	築立塀	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,462.4481	-45,688.6848	任意中点	91.928	55.287	310.568	309.523	308.484	310	186.780	186.131	185.327	–	本書
6	国分寺跡	014	東外郭	1454S70a	築立塀	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,496.4569	-45,501.4511	任意中点	93.866	14.145	317.123	316.055	314.994	315	47.798	47.625	47.465	–	4
7	国分尼寺跡	4	南門	45B001	掘立柱建物	建造	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,445.946	-46,013.1750	任意中点	415.461	94.306	1403.583	1398.957	1394.183	1400	284.817	283.858	282.906	–	7
■付帯道路																								
1	国分松本遺跡	6	東西道路		道路	造営	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,395.5409	-45,864.3864	任意中点【東】	264.867	135.861	894.820	891.808	888.815	–	442.099	440.611	439.132	440	未報告
2	国分松本遺跡	6	東西道路		道路	造営	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,394.9124	-45.896.537	任意中点【西】	287.050	130.439	969.763	966.498	963.255	–	440.668	439.184	437.710	440	未報告
3	上遺跡	1	東西道路		道路	造営	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,376.7659	-45.394.6316	任意中点【東】	205.186	129.664	693.195	690.961	688.543	–	438.054	436.579	435.114	435	6
4	上遺跡	1	東西道路		道路	造営	奈良	8期	講堂中点	国分寺中軸	57,377.0887	-45.405.4955	任意中点【西】	194.319	129.757	656.478	654.289	652.072	–	438.368	436.892	435.426	435	6

に至ることが明らかとなった。なお、十二坊路は鏡山氏による条坊復原案では、西の境界に位置している。しかしこれまで記述してきたように、都における大垣相当施設が未確認であることを考えると、今後の検討課題とせざるを得ない。（中島恒次郎）

【引用および参考文献】

森田勉（1983）「筑前国分寺」『仏教芸術　第 146 号』毎日新聞社

森田勉（1987）「筑前」『新修　国分寺の研究』吉川弘文館

九州歴史資料館（2000）『大宰府史跡　－平成 11 年度発掘調査概報－』

九州歴史資料館（2002）『大宰府政庁跡』

太宰府市教育委員会（1995）『筑前国分尼寺跡Ⅲ』太宰府市の文化財第 25 集

太宰府市教育委員会（1997）『筑前国分寺跡Ⅰ』太宰府市の文化財第 32 集

太宰府市教育委員会（1999）『筑前国分寺跡Ⅱ』太宰府市の文化財第 40 集

太宰府市教育委員会（2008）『太宰府条坊跡 37』太宰府市の文化財第 101 集

阿部義平（1986）「国庁の類型について」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 10 集』国立歴史民俗博物館

阿部義平（1996）「日本列島における都城形成」『国立歴史民俗博物館研究報告　第 36 集』国立歴史民俗博物館

中島恒次郎（1999）「筑前国分寺跡の規模と環境」『古文化談叢　第 42 集』九州古文化研究会

中島恒次郎（2008）「居住空間史としての大宰府条坊論」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室 50 周年記念論集刊行会

馬田弘稔（2008）「第 5 章　第 264 次調査出土の所謂「地鎮具埋納遺構」と「地鎮張り」について（予察）」『大宰府条坊跡 37』太宰府市の文化財第 101 集

【表 10 作表文献】

1 福岡県教育委員会（1977）『筑前国分寺　－昭和 51 年度発掘調査概報－』

2 福岡県教育委員会（1978）『筑前国分寺　－昭和 52 年度発掘調査概報－』

3 九州歴史資料館（2000）『大宰府史跡　平成 11 年発掘調査概報』

4 太宰府市教育委員会（1997）『筑前国分寺跡　Ⅰ』太宰府市の文化財第 32 集

5 太宰府市教育委員会（1999）『筑前国分寺跡　Ⅱ』太宰府市の文化財第 40 集

6 太宰府市教育委員会（1997）『辻遺跡』太宰府市の文化財第 33 集

7 太宰府市教育委員会（1995）『筑前国分尼寺跡　Ⅲ』太宰府市の文化財第 25 集

註

1）金堂跡調査成果から導き出したもので、金堂建物西至から導き出したものではなく、厳密には基壇から導き出したものになる。実数値は、X=57469.0413m、Y=-45596.6962m である。

2）この場合、Ⅱ期施工条坊と、条坊跡 264 次調査地において確認された官衙域縮小に伴う条路施工の二者を指している。

3）政庁Ⅱ期施工条坊規模を踏襲しつつ設計されている金堂－講堂であることを示したが、両施設間の距離は、大尺計算に基づく基準尺を用いた場合と小尺計算に基づく基準尺を用いた場合では、前者の方が完数値を得られることが読み取れる。

表 11. 出土遺物一覧【筑前国分寺跡 第 24 次調査】

S-1

須恵	器	坏c、甕、破片
土師	器	坏c、甕ヤ、破片
土師質土	器	破片
須恵質（輸入）	器	彩釉系無釉陶器
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)
		丸瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)

S-1灰茶色土

須恵	器	蓋c、坏、甕、破片
土師	器	小皿a×坏a、椀c、甕、鍋
越州窯系青磁		椀破片
土師質土	器	鉢
須恵質土	器	鉢
白	磁	破片
中国陶	器	破片
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)
		丸瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)
石製	品	石核、石鏃

S-1暗茶色土

須恵	器	甕
土師	器	坏、甕×鍋？
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)
		丸瓦(縄目叩、無文、破片)

S-2

土師	器	甕、破片

S-3

土師	器	甕、破片
瓦	類	破片(縄目叩)

S-4

須恵	器	甕
瓦	類	平瓦(縄目叩)

S-5

須恵	器	甕、壺
土師	器	坏a、坏、高坏、器台、甕
越州窯系青磁		椀：I-2ｆ
中国陶	器	壺：破片
土師質土	器	鉢
弥生土	器	甕
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片、軒平瓦)
		丸瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片、軒丸瓦)
石製	品	石核、石鏃
土製	品	焼土塊、セン

S-5暗灰色土

瓦	類	平瓦(縄目叩、破片)
		丸瓦(縄目叩、軒丸瓦、破片)

S-5茶褐色土

須恵	器	坏、破片
土師	器	甕、破片
弥生土	器	甕
瓦	類	平瓦(縄目叩、破片)、丸瓦(縄目叩、格子叩、無文)

S-5暗茶色土

須恵	器	壺
土師	器	甕、破片
瓦	類	平瓦(縄目叩、破片)、丸瓦(縄目叩、無文、破片)
石製	品	石英

S-5茶色土

須恵	器	甕
土師	器	坏a、坏c、甕、破片
弥生土	器	甕
石製	品	丸石、剥片(黒曜石)、石包丁
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、破片)
		丸瓦(縄目叩、無文、破片)

S-5灰茶色土

須恵	器	蓋3、坏c、高坏脚部、甕、破片
土師	器	坏a、椀c、甕、把手、鍋、破片
黒色土器		破片
越州窯系青磁		椀：I
龍泉窯系青磁		椀：IV-ｄ、IV-ｅ
白	磁	椀
土師質土	器	鉢
瓦質土	器	鉢
須恵質土	器	鉢
弥生土	器	甕
金属製	品	鉸凎
瓦	類	平瓦(縄目叩、格子叩、無文、軒平瓦、破片)
		丸瓦(縄目叩、格子叩、無文、軒丸瓦、破片)
石製	品	石鏃、石英、砥石
土製	品	セン

S-5明茶色土

須恵	器	壺
土師	器	破片

S-5淡茶色土

須恵	器	坏a、甕
土師	器	坏、甕、破片
弥生土	器	甕
瓦	類	熨斗瓦、平瓦(縄目叩、無文、軒平瓦、破片)
		丸瓦(縄目叩、無文、軒丸瓦、破片)

S-6

土師	器	破片

S-7

土師	器	破片
瓦	類	丸瓦、破片

S-8

土師	器	破片
瓦	類	破片(縄目叩)

S-9

土師	器	破片
金属製	品	鉄釘

S-11

須恵	器	甕
土師	器	甕

S-12

土師	器	破片

灰茶色土

須恵	器	甕、破片
土師	器	坏、破片
瓦	類	平瓦(縄目叩)、丸瓦(格子叩)

表 12. 出土遺物一覧【筑前国分寺跡 第 26 次調査】

S-1茶褐色土

須恵器	蓋3、坏a
土師質土器	鍋
国産陶器	擂鉢（備前系）、小椀(現代)
白磁	椀；Ⅳ（1）
瓦類	平瓦（縄目）、平瓦、丸瓦、 破片（縄目）、破片

S-1暗灰色中粒砂～白色粗粒砂

瓦類	平瓦（格子）、平瓦

S-1暗緑灰色中粒砂

須恵器	坏c、坏、甕
土師器	椀c、小皿a、煮沸具
土師質土器	こね鉢×擂鉢
白磁	椀；破片（華南）（1）
瓦類	平瓦（格子、縄目）、平瓦、 丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、 破片（縄目）、破片

S-1暗灰色粗粒砂

須恵器	蓋c、蓋3、坏c、坏身、皿a、甕、壺
土師器	蓋c、蓋3、坏a、坏d、丸底坏、 椀c、小皿a2、甕
黒色土器A	破片
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀；Ⅰ-1b（1）、Ⅰ（1）
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-b（1）
同安窯系青磁	椀；破片（1）
同安窯系青磁	皿；Ⅰ-2b（1）
瓦質土器	擂鉢
白磁	椀；破片（華南）（1）
	皿；Ⅱ-1a（1）、Ⅱ-1b（1）
	壺（1）
中国陶器	壺；破片（B群）（1）
弥生土器	甕（中期）
瓦類	文字瓦Ⅰ-5、軒平瓦611型式、 軒丸瓦290型式、 平瓦（格子、縄目）、平瓦、 丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、 破片（格子、縄目）、破片
石製品	碁石、石鍋A群（穿孔あり）
金属製品	鉄滓
中国陶器　他	破片（C群）（2）

S-1白色粗粒砂

須恵器	甕、蓋c、小壺、坏身
土師器	椀c、甕、破片
瓦質土器	破片
瓦類	平瓦（格子、縄目）、平瓦、
	丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、
	破片（格子、縄目）、破片

S-1灰色礫

須恵器	坏身、甕
土師器	小皿
黒色土器A	椀c2
瓦類	平瓦（格子、縄目）、平瓦、 丸瓦（格子）、破片（格子）、破片

S-1暗灰色礫

須恵器	坏c、皿a、蓋3、甕、壺、坏蓋、 壺a、鉢a、把手付壺、蓋c、
土師器	甕、丸底坏、小皿a、坏a、坏d、 皿b、小皿a、把手
越州窯系青磁	椀；Ⅰ-2a（1）
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-b（1）
同安窯系青磁	椀；Ⅰ-b（1）
土師質土器	鍋
須恵質土器	鉢、こね鉢
瓦質土器	こね鉢×擂鉢
灰釉陶器	壺
国産陶器	擂鉢（備前系）、蓋
白磁　椀	Ⅱ（1）、Ⅶ-1×3（1）、Ⅳ（3）
白磁　壺他	破片（広東）（1）
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器；壺（1）
肥前系陶磁器	陶器；鉢
国産磁器	染付小皿（現代）
瓦類	軒平瓦611型式、 平瓦（格子、縄目）、平瓦、 丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、 破片（格子、縄目）、破片
石製品	砥石（砂岩）、石鍋
中国陶器	破片（B群）

S-2

須恵器	甕
土師器	供膳具
瓦類	破片（格子）

S-3

須恵器	壺、供膳具
土師器	坏c、皿
瓦類	丸瓦、破片（格子、縄目）、破片

S-4

瓦類	破片

青灰砂

須恵器	蓋3、坏蓋、坏a、坏c、高坏、皿、 甕、壺、こね鉢（篠窯）
土師器	煮沸具
黒色土器B	破片
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀；Ⅲ-3b（1）
	破片；Ⅰ系（1）
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-b（2）
	坏Ⅲ-3a
同安窯系青磁	皿；Ⅰ-2b（1）
須恵質土器	こね鉢（東播）
白磁	椀；Ⅱ-1（1）
	皿；Ⅵ（1）、Ⅱ（1）
中国陶器	壺；破片（B群）（1）
弥生土器	甕（中期）
瓦類	平瓦（格子、縄目）、平瓦、 丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、 破片（格子、縄目）、破片
石製品	石包丁、碁石

表 13. 出土遺物一覧【筑前国分寺跡 第 26 次調査】

黄茶色層

須恵器	坏、坏c、甕
土師器	坏a
白磁	椀；V-2a (1) 、V-2b (1) 、Ⅳ (1)
	皿；Ⅱ-1a (1)
	破片（広東） (1) 、破片（華南） (3)
瓦類	平瓦（格子、縄目）、平瓦、
	丸瓦（格子、縄目）、丸瓦、破片
石製品	破片（滑石）、再加工品（滑石）、
	剥片(黒曜石)

表土

須恵器	蓋c、蓋3、蓋、坏c、坏蓋、甕、壺
	坏身
土師器	坏、煮沸具
越州窯系青磁	破片；Ⅰ類系 (1)
龍泉窯系青磁	椀；Ⅱ-a (1)、Ⅳ (1)
須恵質土器	こね鉢
国産陶器	椀；皿（唐津）、甕、擂鉢
白磁	椀；Ⅷ (2) 、破片（華南） (1)
	皿；Ⅵ (1)
	破片（華南） (1)
国産磁器	染付皿、青磁椀（現代）、小壺
瓦類	平瓦(格子、縄目)、平瓦、
	丸瓦(格子、縄目)、丸瓦、
	破片(格子、縄目)、破片、
	軒平瓦611型式

表 14. 土器計測表【筑前国分寺跡 第 27 次調査】

※A：内底のナデ、B：口縁状況痕
※計測値の（ ）は復元値、+は残存

S-1暗茶色土

器種	部位	調査番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a1	～?	27-0-1	8-001	8.2	1.0	(6.6)	○	×	焼煙付着

S-1灰褐色土

器種	部位	調査番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a	～?	27-0-6	8-002	—	1.4+	—	—	—	
	坏a	～?	27-0-7	8-003	—	1.1+	(8.2)	—	—	
黒色土器B類	椀c		27-0-8	8-005	—	1.9+	—	—	—	

S-2黒色土

器種	部位	調査番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	小皿a		27-7-22	8-001	—	0.9+	—	—	—	
	椀c		27-7-23	8-002	—	1.8+	(6.8)	—	—	
	大椀c×鍋		27-7-24	8-008	—	1.7+	—	—	—	
黒色土器B類	椀c		27-7-26	8-004	—	1.8+	—	—	—	
	椀c		27-7-27	8-003	—	1.5+	—	—	—	

茶色土層

器種	部位	調査番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
須恵器	坏c	～?	27-0-30	8-002	—	1.4+	—	○	
土師器	椀c	—	27-0-32	8-005	—	1.6+	—	—	
黒色土器A類	椀c	—	27-0-33	8-006	—	1.6+	—	—	

淡灰色土層

器種	部位	調査番号	遺物番号	口径	高さ	底径	A	B	備考
土師器	坏a		27-0-43	8-002	—	1.3+				
黒色土器B類	椀c		27-0-44	8-001	—	1.1+				

表 15. 出土遺物一覧【筑前国分寺跡 第 27 次調査】

S-1暗茶色土　12c中～

土師器	煮炊具、小皿a
瓦類	平瓦（縄目、格子目）、丸瓦(格子目、文字瓦「介」)

S-1灰褐色土　～平安前期

須恵器	坏a×蓋、甕、壺
土師器	坏a?、坏a、坏×椀片
黒色土器A類	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)
瓦類	平瓦（縄目、格子目）、丸瓦（格子目）、
	軒平瓦（格子目）、軒丸瓦（隠蘭類式）

S-1茶褐色土　～平安（前期?）

瓦類	平瓦(縄目、格子目)、丸瓦(格子目(文字瓦?)、縄目)

S-2茶色土　～平安前・中期

須恵器	大甕、壺（平底）、円面硯
土師器	坏×小皿、大椀×鉢、椀c、煮炊具
黒色土器A類	椀c
越州窯系青磁	椀：I(1)
瓦類	平瓦（縄目、格子目）、丸瓦（格子目）
その他	鉱滓

S-3　古代

瓦類	破片

淡灰色土層　～平安後期

須恵器	坏a?、坏a×蓋、大甕、甕、壺
土師器	坏a(赤色・平安)、椀c、椀c
土師器×瓦類	椀c
黒色土器B類	椀c
越州窯系青磁	椀：I-5a(1)、II(1)
白磁	椀：V?(1)
弥生土器	器台?（後期?）
瓦類	平瓦（縄目、格子目、文字瓦（平井））、
	丸瓦（格子目）、軒平瓦、軒丸瓦
その他	鉱滓?

茶色土層

須恵器	坏c、蓋?、甕、壺
土師器	坏a×小皿a、供膳具片、椀、把手、煮炊具片
黒色土器B類	黒色土器B類? 椀c
緑釉陶器	片（洛西）
瓦類	平瓦（縄目、格子目）、丸瓦（縄目、格子目）
	軒丸瓦、いぶし瓦（近世～）
石製品	滑石片
その他	鉱滓

淡茶色土層

須恵器	甕
瓦類	平瓦（縄目、格子目）

表土

須恵器	壺
土師器	供膳具片
瓦類	平瓦（格子目）、丸瓦（格子目）

報告書抄録

ふりがな	ちくぜんこくぶんじあと 3
書名	筑前国分寺跡 3
副書名	西外郭施設・付帯施設の調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第106集
編著者	中島恒次郎　井上信正　宮崎亮一　下高大輔
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2009(平成21)年1月31日

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【観山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標（国土座標第II系） X	座標（国土座標第II系） Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
ちくぜんこくぶんじあと 筑前国分寺跡 第24次調査	条坊外	だざいふしこくぶんちょうめ 太宰府市国分6丁目	402214	210044-24	57461.000	−45691.000	1999.4.13	1999.5.7	57	専用住宅
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良・平安	西外郭施設		瓦		国分寺西辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【観山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標（国土座標第II系） X	座標（国土座標第II系） Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
ちくぜんこくぶんじあと 筑前国分寺跡 第26次調査	条坊外	だざいふしこくぶんちょうめ 太宰府市国分6丁目	402214	210044-26	57545.000	−45675.000	1999.11.4	1999.12.28	233.5	田普請
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良～室町	河川		瓦		国分寺西辺の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【観山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標（国土座標第II系） X	座標（国土座標第II系） Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
ちくぜんこくぶんじあと 筑前国分寺跡 第27次調査	条坊外	だざいふしこくぶんちょうめ 太宰府市国分6丁目	402214	210044-27	57383.000	−45524.000	2001.10.4	2001.10.30	28.23	専用住宅
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	寺院	奈良	国分寺前面道路		瓦		国分寺前面道路の調査			

ふりがな 所収遺跡名	大宰府条坊 【観山復原案】	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	座標（国土座標第II系） X	座標（国土座標第II系） Y	調査期間 開始	調査期間 終了	調査面積 ㎡	調査原因
うらやまいせき 裏山遺跡 第1次調査	条坊外	だざいふしこくぶんちょうめ 太宰府市国分6丁目	402214	210 −1 ※	57870.000	−45539.000	2008.6.23	2008.7.11	160	専用住宅
	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
	散布地	古墳	小穴		須恵器					

※未登録

写真図版

※掲載写真ならびにCD-ROM搭載写真

■本書に掲載している写真

モノクロ情報では、伝達できる情報量に限りがあるため、カラー情報としてCD-ROMへカラー写真を搭載している。

■CD搭載写真

遺構・遺物に関するカラー写真をCD-ROMへ搭載している。参照していただくためには、CD-ROM搭載の「はじめにお読みください。」を読んでいただき、写真参照を行っていただきたい。

24 次調査　調査区全景（南から）

24 次調査　柱穴半裁後状況（南から）

24 次調査　調査区全景（北から）

24 次調査　24SX005 瓦出土状況（南から）

26 次調査　調査区全景（南から）

26 次調査　西調査区全景（南から）

27 次調査　調査区全景（空中写真）

27 次調査　a トレンチ 27SD001 完掘（南から）

27 次調査　b トレンチ 27SD001 完掘（南から）

27 次調査　a トレンチ 東壁土層（南西から）

裏山 1 次調査　南調査区完掘（東から）

裏山 1 次調査　北調査区完掘（南東から）

裏山 1 次調査　北調査区完掘（北から）

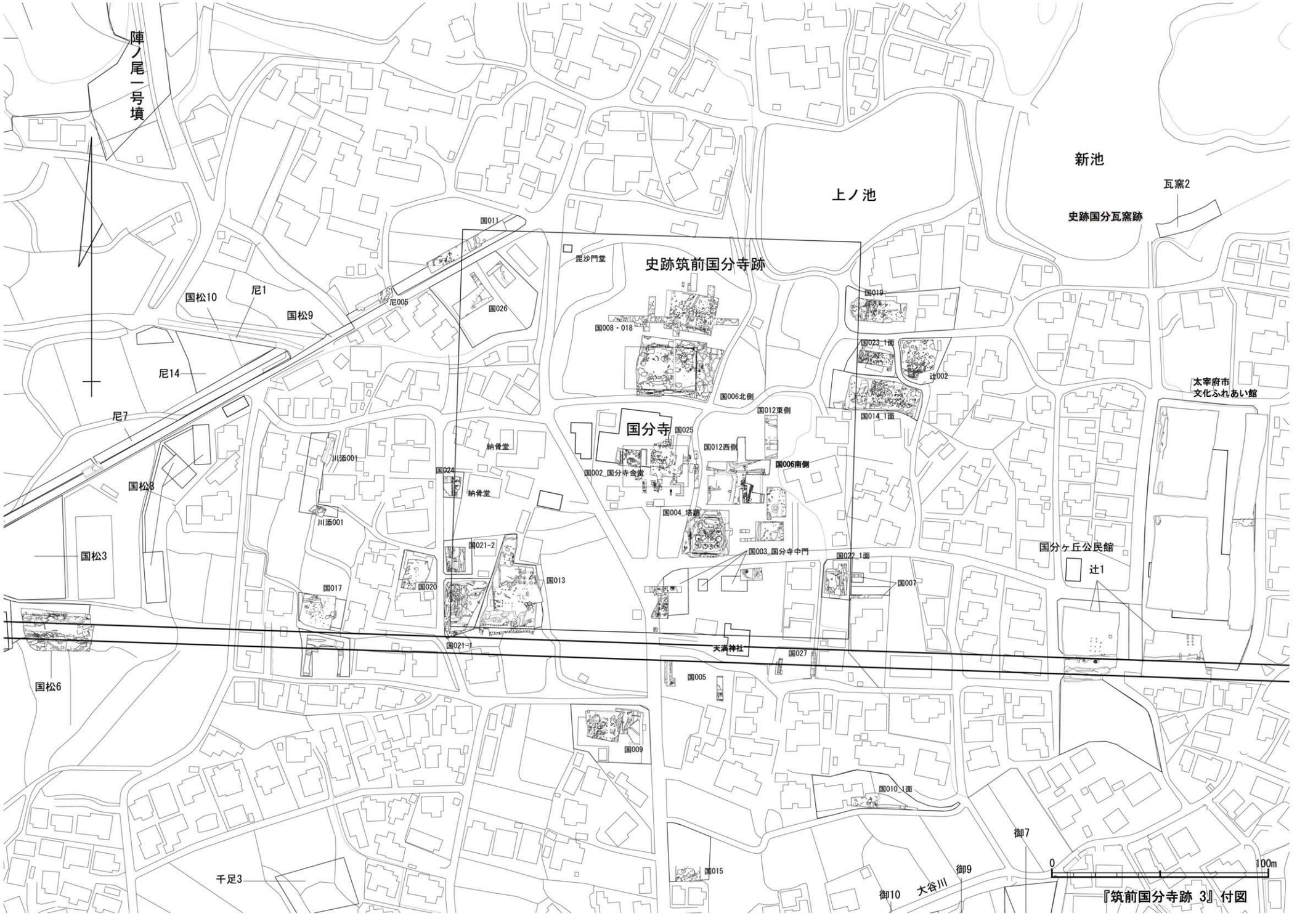
裏山 1 次調査　1SX001 遺物出土状況（南から）

太宰府市の文化財　第106集
筑前国分寺跡　3

－西外郭施設・付帯施設の調査－
筑前国分寺跡
裏山遺跡
平成21（2009）年1月

編集　太宰府市教育委員会　文化財課
発行　〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
印刷　株式会社　四ヶ所
福岡県朝倉市馬田336

図35. 筑前国分寺と大宰府条坊との関係図


陣ノ尾一号墳
新池
上ノ池
瓦窯2
史跡国分瓦窯跡
国011
毘沙門堂
史跡筑前国分寺跡
国019
国008・018
国023_1面
辻002
国006北側
国012東側
国014_1面
太宰府市
文化ふれあい館
国025
国012西側
国006南側
国002_国分寺金堂
国004_塔跡
国003_国分寺中門
国022_1面
国007
国分ヶ丘公民館
辻1
国026
尼005
国松10
尼1
国松9
尼14
尼7
国松8
国松3
国松6
川添001
納骨堂
国024
国021-2
国021-1
国013
国017
国020
天満神社
国027
国005
国009
国010_1面
国015
千足3
御7
御9
御10
大谷川
0
100m
『筑前国分寺跡 3』付図